

松山遺跡第6次発掘調査報告書

(京都府京丹後市文化財調査報告書第6集)

2011. 3

京丹後市教育委員会

序

京丹後市は「ひと・みず・みどりー歴史と自然が織りなす交流のまちー」のスローガンに示されるように豊かな自然とともに数多くの文化財が残されたまちであり、その中でも5つの国指定史跡をはじめ6,000ヶ所近くの埋蔵文化財が確認される、京都府でも有数の遺跡密集地として知られている地域でもあります。

近年この地域では、国営農地開発事業や府営ほ場整備事業などの農業関連事業や施設・交通網整備事業などに伴い、発掘調査が数多く実施されてきました。その調査成果により、この地の人々が生産加工・交易を基盤とし、当時の日本でも有数の勢力を誇っていたことが明らかにされてきました。その輝かしい成果の一方で調査の後消えていく遺跡も数多く、開発と保存についての調整が常に課題となっています。

またこれまでの調査成果をどのように市民のみなさんに還元し活用していくのか、先人の残した多くの文化財を守り、いかに後世に伝えていくのか、市民の方々の一人一人にとっても求められている課題とあって良いでしょう。今後の啓発事業が大きな課題といえます。

本年度は、府営ほ場整備事業に伴う松山遺跡の範囲確認のための発掘調査を実施いたしました。今回の発掘調査の成果は本書により紹介しておりますが、弥生時代から鎌倉時代にかけて、この地に生活されていた先人の生活の痕跡を確認することができました。今回得られました成果は、丹後古代の里資料館を活用した展示や講座などを通じて、今後、市民へ還元していく所存です。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご指導ご協力いただきました関係機関の方々、さらに観測史上最高となり、ほぼ毎日続いた真夏日の酷暑の中、発掘調査に従事していただきました作業員・補助員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

京丹後市教育委員会
教育長 米田 敦弘

例 言

1. 本書は、京丹後市教育委員会が「平成22年度府営経営体育成基盤整備事業における文化財調査に関する協定書」に基づき、平成22年度に実施した京都府京丹後市大宮町森本小字松山・織戸・宮の奥に所在する松山遺跡(第6次調査)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、京丹後市教育委員会が主体となり、国から国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府から埋蔵文化財緊急発掘調査費補助金の交付を受けて実施した。
3. 発掘調査は、以下の期間に実施した。

平成22年7月20日～9月3日(現地調査)、
平成22年9月6日～11月30日(整理作業)
4. 発掘調査記録写真の撮影は、キャノンEOS-55(カメラ)、キャノンEF50mm 1:2.5(レンズ)、UVフィルターを使用した白黒フィルム・リバーサルフィルムによる撮影のほか、デジタルカメラ(Panasonic DMC-FX100)による撮影を行った。また出土遺物の写真撮影は、上記デジタルカメラを使用した。なお本書掲載の写真図版は、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター提供によるもののほかは、デジタルカメラ撮影によるものを使用している。
5. 本書は、発掘調査の記録である基本的な図面を挿図として本文中に収め、写真は図版として巻末にとりまとめた。
6. 本書の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』によるものである。
7. 本書に使用した方位は真北で、レベルは絶対高である。
8. 本書に用いた遺構略号は、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびきー集落遺跡発掘編-2010年』に準拠した。なお現地調査図面や遺物注記時に用いた遺構名・遺構略号の中には、報告書編集時に変更したものがあり、本報告書に用いたものを正式な遺構名とする。
9. 本書の編集は、京丹後市教育委員会事務局文化財保護課が担当した。執筆・編集の実務は、吉田・横島の指導のもと、岡林・橋本が行った。
10. 本書に収録する出土遺物、写真・実測図類の調査記録は、京丹後市教育委員会が保管している。

なお本文中写真および写真図版の中には、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター提供および京都府立丹後郷土資料館所蔵のものがあり、その旨を明記した。
11. 本書5頁の第1図 周辺遺跡分布図に用いた1:25,000地形図は、国土地理院発行の
 - ・NI-53-13-15-3「峰山」(昭和47年測量・平成13年修正測量) 平成15年2月1日発行
 - ・NI-53-13-15-4「四辻」(昭和47年測量・平成12年修正測量) 平成13年5月1日発行
 - ・NI-53-13-15-2「宮津」(昭和7年測量・昭和47年改測・平成13年修正測量) 平成14年10月1日発行
 - ・NI-53-13-11-3, 15-1「日置」(昭和7年測量・昭和47年改測・平成13年修正測量) 平成14年8月1日発行を使用したものである。
12. 本発掘調査の実施および整理・報告に関しては、多くの方々から指導、助言、協力を得た。記して厚く感謝申しあげる次第である。

京都府教育庁指導部文化財保護課、京都府丹後教育局、京都府丹後広域振興局、
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都府立丹後郷土資料館、丹後地区森林組合、水口組
戸原和人・奈良康正・伊野近富(順不同・敬称略)

目 次

第1章 はじめに	1 (岡林・橋本)
(1) 調査に至る経過	1
(2) 発掘調査の経過	2
(3) 調査体制	3
第2章 位置と環境	4 (橋本)
第3章 検出遺構	6 (橋本)
(1) 層序および地区割り	6
(2) 上層遺構	8
(3) 下層遺構	12
第4章 出土遺物	14 (橋本)
(1) 上層遺構	14
(2) 上層包含層 (第2・3層)	14
(3) 下層遺構	16
(4) 下層包含層 (第4層)	18
第5章 総括	22 (橋本)
(1) 円面硯について	22
(2) 総括	24

写真図版

報告書抄録

挿図目次



松山遺跡出土注口土器（京都府立丹後郷土資料館所蔵）

第 1 図	周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	・・・ 5
第 2 図	調査トレンチ断面図 (S=1/100)	・・・ 6
第 3 図	調査地位置図 (S=1/5,000)	・・・ 7
第 4 図	調査トレンチ地区割図 (S=1/1,000)	・・・ 7
第 5 図	調査トレンチ平面図 (S=1/100)	・・・ 9
第 6 図	上層遺構平面図 (S=1/50)	・・・ 11
第 7 図	下層遺構平面図 (S=1/50)	・・・ 13
第 8 図	上層遺構・包含層出土遺物実測図	・・・ 15
第 9 図	下層遺構出土遺物実測図	・・・ 17
第 10 図	下層包含層出土遺物実測図	・・・ 19
第 11 図	下層包含層出土遺物実測図	・・・ 21
第 12 図	丹後地域出土の円面硯	・・・ 21

写真図版目次

図版 1 (1) 調査前遠景	図版 6 (1) 下層遺構 竪穴住居S I 301検出状況(B区)
(2) 調査後遠景(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター提供)	(2) 下層遺構 竪穴住居S I 301調査後全景
図版 2 (1) 上層遺構全景(北東側より)	図版 7 (1) 下層遺構S I 303 調査後全景(E・F区)
(2) 上層遺構全景(南西側より)	(2) 下層遺構 G～H区調査後全景
(3) C・D区上層遺構全景(南西側より)	図版 8 (1) 出土遺物(上層遺構・上層包含層)
図版 3 (1) 上層遺構 不明落ち込み遺構 SX111・134(D区)	(2) 出土遺物(下層遺構)
(2) 上層遺構 不明落ち込み遺構 SX141・162(D・E区)	図版 9 出土遺物(下層包含層)
図版 4 (1) 上層遺構 土壌SX112(D区)	図版10(1)上層遺構出土土器
(2) 上層遺構SX226検出状況(G区)	(2)上層包含層出土土器
(3) 上層遺構SX226調査後全景(G区)	図版11(1)上層遺構・包含層出土土器(磁器)
図版 5 (1) 下層遺構調査後全景(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター提供)	(2)上層遺構・包含層出土土器
(2) 下層遺構調査後全景	図版12(1)下層遺構出土土器
	(2)下層遺構出土土器
	図版13(1)下層包含層出土土器(土師器)
	(2)下層包含層出土土器(土師器)
	図版14(1)下層包含層出土土器(須恵器)
	(2)下層包含層出土土器(弥生土器)

第1章 調査に至る経過

(1) 調査に至る経過

松山遺跡は、京丹後市大宮町森本小字松山・織戸・宮の奥に所在する散布地である。遺跡は、京丹後市立大宮第三小学校の南側に位置し、竹野川左岸段丘上および竹野川氾濫原に立地する。

本遺跡は、これまでに縄文時代後期の注口土器(前頁写真)や弥生土器が表採されており、内容は不明ながら内陸部に位置する縄文～弥生時代の遺跡として知られていた。しかし、遺跡の範囲や詳細な内容については不明の部分が多かった。

遺跡周辺は、大宮第三小学校が立地する箇所を中心に、昭和14～15年ころに耕地整理が行われ、小学校周辺から五輪塔の出土があったという。また森本地区の氏神である大屋神社は、遺跡の奥にのびる小字宮の奥の谷筋に勧請されたものであったが、寛文8(1668)年に現在地へ移転したものと伝える。

今回の調査は、大宮第三小学校南側の竹野川左岸一帯が府営経営体育成基盤整備事業の対象地となったため実施したものである。平成21年4月13日には、京都府丹後土地改良事務所長より文化財保護法第94条第1項に基づく通知が行われ、同年5月26日には、京都府教育委員会(以下、府教委とする)より発掘調査の指示が行われた。

これを受け、京丹後市教育委員会(以下、市教委とする)では、地元からも早急な事業実施の要望を受けていたことも踏まえ、府教委や京都府丹後土地改良事務所など関係機関との協議を行った。その結果、平成21年度に遺跡の範囲を確認するための試掘調査を府教委と市教委が分担して実施し、その調査結果を受けて翌年度に本発掘調査が必要な範囲の判断を行うこととなった。

平成21年度の試掘調査は、事業対象地のうち遺跡縁部と想定される低地部分を市教委が担当、遺跡中心部分と見られる段丘状部分を府教委が担当することとしたが、遺跡北側部分の一部については市教委が調査した箇所があった。市教委の試掘調査は、事業計画および地元要望を考慮し、緊急性が高く耕作に影響を及ぼさない

箇所を先行して平成21年5月28日～29日に行い(第1次調査)、田畑の収穫後の9月24日～10月16日に再度調査を実施した(第2次調査)^(註1)。府教委の試掘調査は、市教委の調査終了後の10月16日～11月18日に実施された(第3次調査)^(註2)。その結果、工事造成に伴い削平を受ける箇所に弥生時代～中世の遺構や遺物包含層が存在することが判明した。

第1～3次の試掘調査の内容を受け、遺跡の取り扱いについて関係機関との協議が行われた。その結果、事業計画の中で切土造成となった箇所について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査の実施にあたり平成22年4月1日には、京都府丹後広域振興局長・府教委教育長・京丹後市長との間で埋蔵文化財発掘調査に関する協定書「平成22年度府営経営体育成基盤整備事業における文化財調査に関する協定書」が結ばれた。その上で平成22年度は、本協定書の内容をもとに、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター・府教委・市教委の3機関が分担して本発掘調査を実施することとなった。なお府教委・市教委調査分は、協定書全体の農家負担分調査に該当しており、農家負担分調査の規模が大きかったため、一部を市教委が分担して実施した。

平成22年度松山遺跡発掘調査の調査次数は、最初に着手した財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター調査分を第4次調査、次に着手した府教委調査分を第5次調査、最後に着手した市教委調査分を第6次調査とした。

(2)発掘調査の経過

市教委が発掘調査を実施することとなった第6次調査地は、平成21年度府教委試掘調査7トレンチの南東側、山側へ一段上がった水田に位置する。なお平成21年度試掘7トレンチ部分の水田には、府教委が平成22年6月10日～7月16日に本調査に入った(第5次調査)。

調査対象地は、折しも梅雨時であったことも手伝い雑草が繁茂していた。そのため調査開始前の7月14～16日には、丹後地区森林組合に委託して雑草の草刈りを実施し、終了後、発掘調査に入った。

発掘調査は、7月20日に、重機による調査対象地の耕作土を除去する作業から開始した。耕作土は水田面の約半分を除去し、1箇所にも固めて保管した。耕作土除去後には、北西側の畔畦より1m山側の部分に長辺40.6m×短辺2.8mの調査トレンチを設定し、翌21日には調査トレンチ内の重機掘削を行った。その際、トレンチの南端の試し掘りを行い、府教委調査地との層序の比較し、大きな相違がないことを確認した。その上で、後述する第4層を残し、第2層と第3層を除去することとした。しかし第3層除去中に流路状の遺構を確認した地点や、調査トレンチの山側半分のみが第4層面となる箇所もあり、実際には、第2層除去のみにとどめた箇所が多い。

重機掘削終了の翌22日からは、作業員4名を投入し、人力による掘削を開始した。調査開始時期は、折しも梅雨明けの時期と重なった。また今夏は、平年の平均気温より約1.7℃高い観測史上最高を記録した年となった。そのため調査は、ほぼ毎日、真夏日でのもと、例年以上の猛暑の下での作業となった。

猛暑の下での作業を円滑に進めるため、今回の調査では、調査トレンチ上面にパイプテント(5m×3.5m)を立てた。パイプテントの設置は、直射日光を避けることができただけでなく、遺構検出作業の効率化や作業従事者の疲労軽減にも貢献した。8月17日以降は、作業員を2名増員した関係もあり、パイプテント1張を増加し、2張りを使用して作業を行った。

調査地内の遺構は、隣接する府教委第5次調査地の様相から、当初、第5層上面の遺構のみと予測されていた。しかし実際には、さらに上層の第4層上面にも遺構が存在することがわかったため、急遽、上層遺構の検出および遺構の掘削を行うこととなった。上層遺構の調査は、8月6日に掘削・写真撮影が終了した。

8月9日より、上層遺構の図面作成に平行してトレンチ内各地区の第4層の掘削にかかり、第5層上面の下層遺構検出につとめた。遺構面が2面あったことから、8月17日以降は作業員2名を増員し、掘削・精査にあたり、さらに当初想定より作業量が大幅に増加していたことから、作業員の派遣期間を2日間延長した。

当初調査終了予定であった8月31日には、関係者説明会を開催し、調査の中間報告を行った。その後、9月2日には、遺構掘削・図面作成が終了し、耕作土・掘削土の明示や機材の撤収を行った。翌3日には、すべての機材を撤収し、京都府丹後広域振興局へ現地の引渡しを行い、調査を終了した。最終的な調査面積は113㎡となり、コンテナ20箱分の遺物が出土した。

出土遺物の整理は、発掘調査終了後の9月6日より、京丹後市立丹後古代の里資料館にて、調査補助員1名および整理員2名の体制で実施した。遺物の出土量は、調査面積に比して多く、9月は洗浄のみとなったが、10月6日より注記・接合および遺物実測を始めた。途中、10月25日には、調査補助員を1名増員し、図面トレースを併行して進めた。図面等が完成した11月29日には、整理作業を終了した。

報告書の原稿作成は、これらの整理作業に併行して行った。大部分の原稿が完成した12月10日には、報告書作成に係る事務手続を起工し、年末には業者選定・契約を行い、原稿入稿を行った。

(3)調査体制

今回の松山遺跡第6次発掘調査は、以下の体制のもとで実施した。

調査期間 平成22年7月20日～9月3日（現地調査）
平成22年9月6日～11月29日（整理作業）

調査主体者 京丹後市教育委員会（教育長 米田敦弘）

調査事務局 京丹後市教育委員会事務局文化財保護課 課長 吉田 誠
課長補佐 横島 勝則

調査担当者 京丹後市教育委員会事務局文化財保護課 主任 岡林 峰夫
主任技師 橋本 勝行

調査補助員 瀬古諒子・奥田栄作

作業員 安井環・山下義郎・岡本弥・岡本栄・中西富雄・小牧敬典・吉岡勇作・西泉輝昭
(株式会社京丹後市総合サービス派遣)

整理員 広瀬依子・大江智恵(株式会社京丹後市総合サービス派遣)

なお今回の調査に際して市教委では、発掘調査状況確認委員会を設置し、調査開始前の7月15日、および整理作業途中の11月22日に調査の進捗状況や整理・報告状況の確認と協議を行い、事業の適正な執行につとめた。

第2章 位置と環境

松山遺跡は、京丹後市大宮町の東部、丹後半島を南北に流れる竹野川上流部に所在する。

竹野川は、大宮町北東部の金剛童子山系を水源とし、まず木積山山系に沿って南進し、山系南端で北へ流れを変え北進し日本海に注ぐ。本遺跡は竹野川が南進する上流地域の森本地区に位置しており、竹野川左岸の段丘上に立地する。竹野川をさらに上流にさかのぼった五十河・新宮・延利・久住・明田地区を含め、このあたりは、古代から中世に三重郷と呼ばれる地域であった。

この地域の先人の営みは、縄文時代にさかのぼる。松山遺跡の北側に位置する沖田遺跡^(註3)では縄文時代早期～後期の土器、さらに松山遺跡においても後期の注口土器が出土している。竹野川をさかのぼり左岸段丘上に立地する五十河遺跡^(註4)では、縄文時代前期の土器・石匙・サヌカイトの剥片、支流の新宮川左岸段丘上に立地する新宮遺跡^(註5)では、時期は不明ながらサヌカイトの剥片が出土している。現在のところ縄文時代の遺構は不明であるが、遺物の分布から見て内陸部の段丘上を中心に集落が散在するようすがうかがえる。

弥生時代の幕開けを示す資料は、府道網野岩滝線と竹野川が合流する地点付近の扇状地上に立地する延利遺跡^(註6)や沖田遺跡より出土した前期の土器がある。中期には、竹野川左岸の自然堤防上に立地する稻荷岡遺跡^(註7)より、弥生時代中期後葉の土器を含む流路跡が見つかっている。後期には、沖田遺跡のほか、竹野川支流の久住川左岸に立地する久住遺跡^(註8)、竹野川を下った三重地区の三重遺跡^(註9)などが見られる。これら弥生時代の集落遺跡の様相に比べて、当該期の墳墓のようすは明らかではない。わずかに、明治33(1900)年に三重地区から中郡盆地へ抜ける三坂峠の開鑿工事中に発見されたガラス釧を伴うビクニ屋敷遺跡^(註10)が知られるのみである。

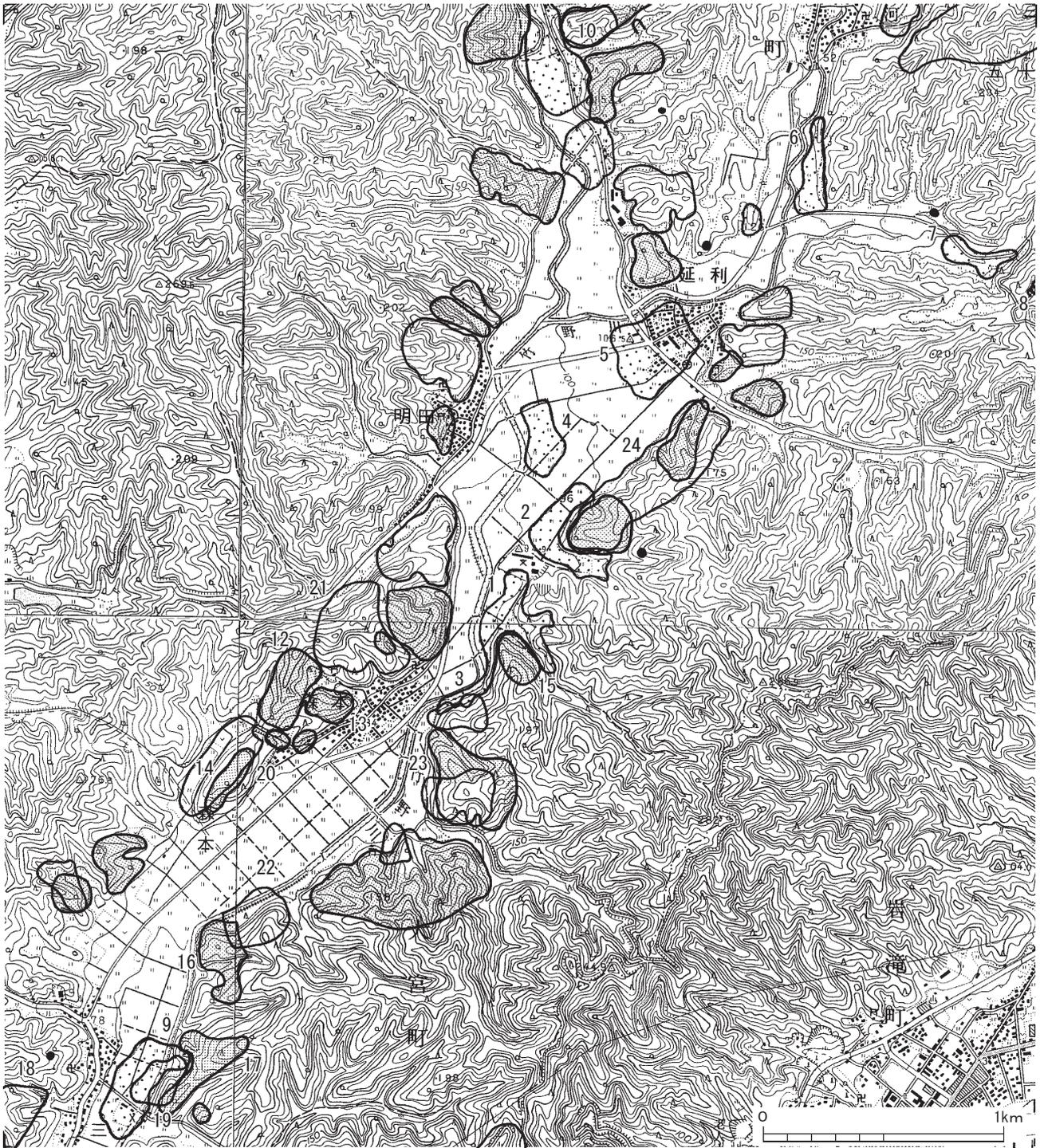
古墳時代に入ると、久住遺跡では前期後葉～中期前葉の土器を含む流路跡が見つかっている。中期後葉～後期前葉には、新宮遺跡や五十河遺跡・沖田遺跡より竪穴建物跡が見つかっているほか、

延利遺跡から当該期の土器が出土している。また遺跡南側に位置するマンジョウジ遺跡^(註11)では、多数のミニチュア土器が表採されており、祭祀遺跡と推定されている。

遺跡背後の丘陵上には、古墳・山城跡などが見られないが、遺跡南方の丘陵上には89基からなる星ノ内古墳群が所在する。また竹野川を挟んで対岸に位置する丘陵上には、森本大谷古墳群、愛宕神社古墳群、大谷城古墳群が所在する。これに対して横穴式石室を埋葬施設とする古墳は数少なく、わずかに遺跡北側の谷奥に所在する井内谷古墳が知られるにすぎない。これらはいずれも未調査のため、内容は明らかではない。この地域では、前期の大内北3号墳^(註12)のほか、中期の大内1号墳^(註13)のようすが明らかになっているに過ぎない。

飛鳥時代に入ると、前期には新宮窯跡^(註14)が操業するほか、新宮遺跡・久住遺跡などにおいて住居・土器などが見られる。和銅6(713)年丹後分国以降の奈良時代には、山を一つ越えた東側の宮津市府中地域が国府・国分寺などの設置地域と推定されており、遺跡周辺はその後背地として位置付けられる。この時期から平安時代にかけての遺跡は少ないが、久住遺跡のように緑釉陶器を出土する遺跡も見られる。平安時代後期から鎌倉時代には、五十河遺跡や沖田遺跡が知られる。

室町時代～戦国時代のこの地域を記した文献には、天文7(1538)年の『丹後国御檀家帳』^(註15)がある。「見ぬの里」には、「大なる城主」として成吉孫治郎殿・榎並殿、「城主」として成吉新左衛門尉殿が見える。この地域に残された三重城跡・三重支城跡・三重大内城跡、森本大谷城跡・森本城跡・星ノ内南城跡・星ノ内城跡・縁多山城跡などの城跡には、これら城主クラスのものが含まれるものであろう。文献に記される地名から見ると、現在の集落は、この時期に成立したものと推定される。



第1図 周辺遺跡分布図(S=1/25,000)

- 1 松山遺跡(調査地) 2 沖田遺跡 3 マンジョウジ遺跡 4 稲荷岡遺跡 5 延利遺跡
- 6 五十河遺跡 7 新宮遺跡 8 新宮窯跡 9 三重遺跡 10 久住遺跡
- 11 星の内古墳群 12 大谷古墳群 13 愛宕神社古墳群 14 大谷城古墳群 15 井内谷古墳
- 16 大内北古墳群 17 大内古墳群 18 三重支城跡 19 三重大内城跡
- 20 森本大谷城跡 21 森本城跡 22 星ノ内南城跡 23 星ノ内城跡 24 縁多山城跡

第3章 検出遺構

(1) 層序および地区割り (第2～4図)

第6次調査地は、平成21年度府教委試掘調査7トレンチの南東側、山側へ一段上がった水田に位置する。今回の調査では、調査対象地の水田の北西側畔畦より1m山側の部分に、長辺40.6m×短辺2.8mの調査トレンチを設定し、遺構の有無を確認した。

細長い調査トレンチとなったため、遺物包含層の取り上げ地区として、5m刻みでA～H区に地区割りを行った。層序は、大きく

- 第1層 現耕作土、
- 第2層 旧耕作土・床土、
- 第3層 鎌倉時代前期を下限とする遺物包含層、
- 第4層 弥生～奈良時代の遺物包含層、上層遺構面、
- 第5層 黒ボク層(無遺物)、下層遺構面、
- 第6層 扇状地性の砂礫層

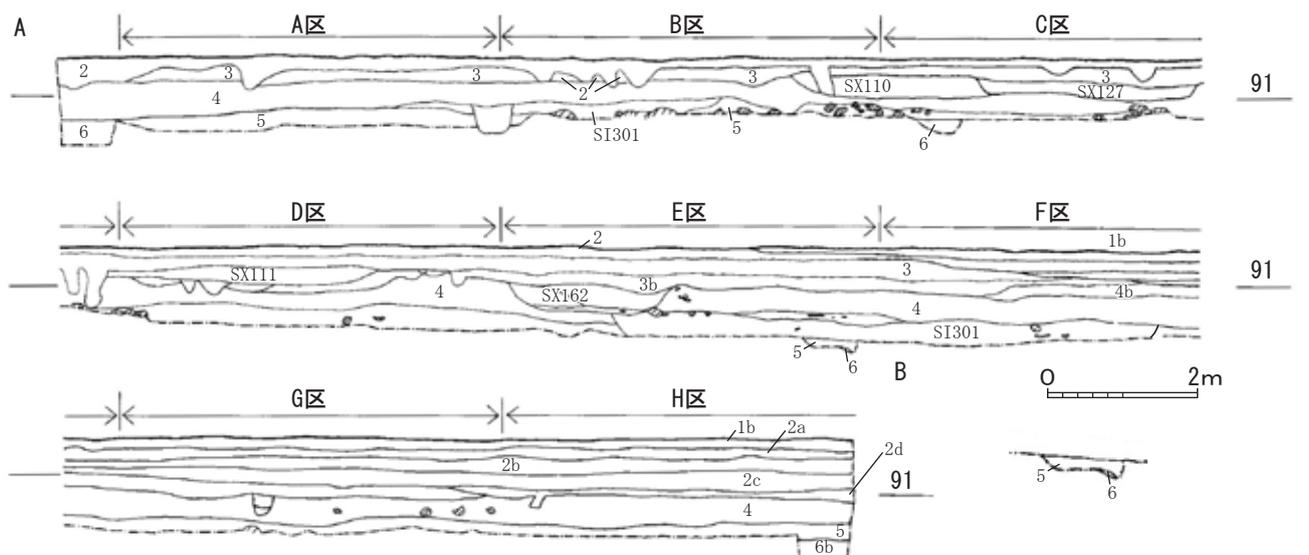
の6層に分けられる。2～5層は、場所によりさらにいくつかの層に分かれる箇所が見られる。

最も大きな変化が見られるのはF区より北西側である。F区途中より北西側では、第3層が見られなくなり、入れ変わって第2層がa～cの

3面に分かれ、約40cmと厚みを増し、さらに2a層上面には第4層に類似する盛土(1b層)が見られる。そのため、現耕作面の区画整理がなされる以前の段階には、F区を境界とする地割が存在したと思われる。H区より北西側の2層は、2c層下面にもう1層(2d層)が加わり、約50cmの厚さを測る。

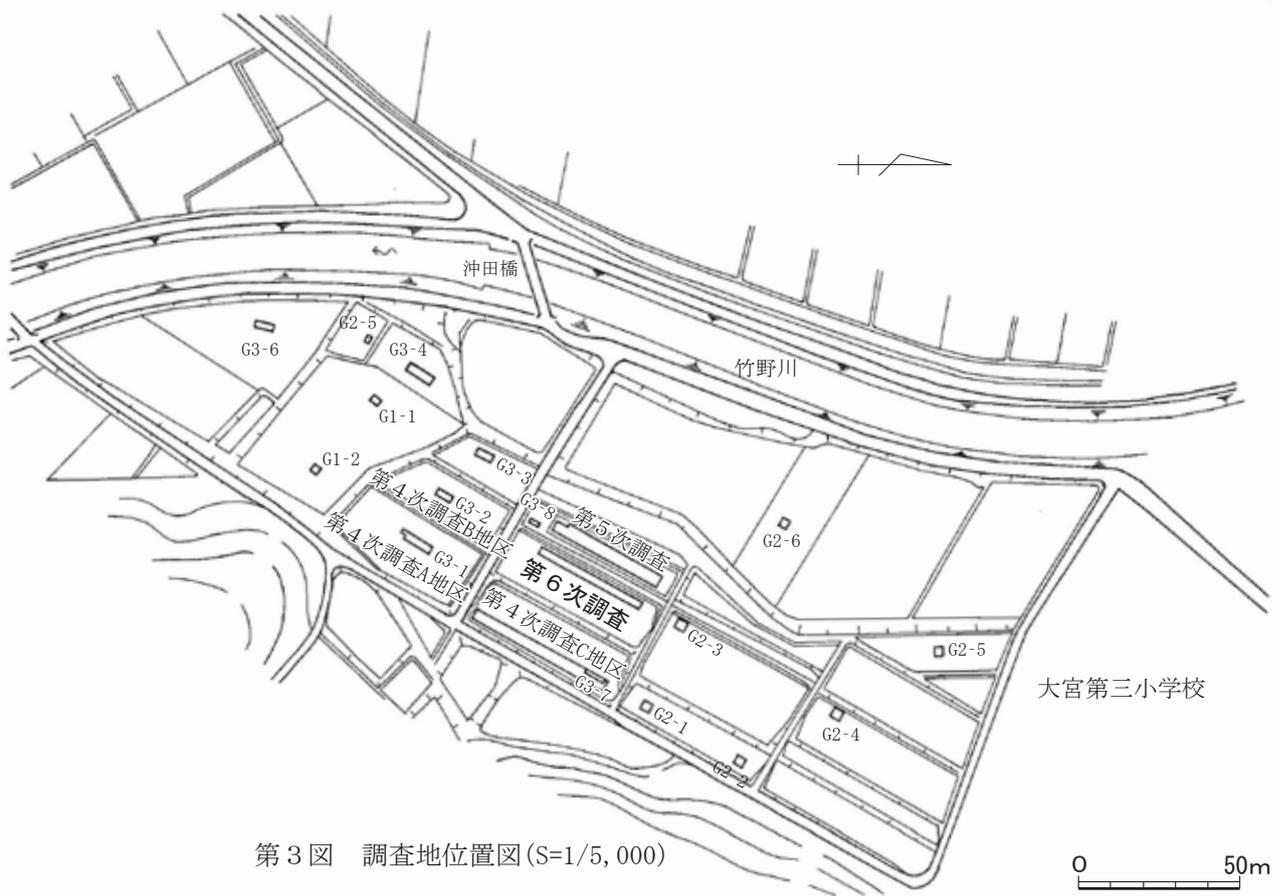
第3層は、A～F区までの広い範囲に分布し、G・H区では消えてしまう。E～F区では、さらに2つに細分される。一部は重機掘削の際に除去していたが、鎌倉時代前期を下限とし弥生時代後期～奈良時代を中心とする遺物をコンテナ4箱分包含していた。

第4層は、トレンチ全体に分布する。厚さは、約20～40cmを測り、弥生時代～奈良時代の遺物をコンテナ10箱分と大量に包含していた。本層は、A～G区の断面観察では、さらに細分することが極めて困難であった。掘削時の印象では、第4層の上面側から出土する遺物には飛鳥～奈良時代のものが含まれ、下側に行くと弥生時代後期～古墳時代中期の遺物のみとなる傾向が見られた。

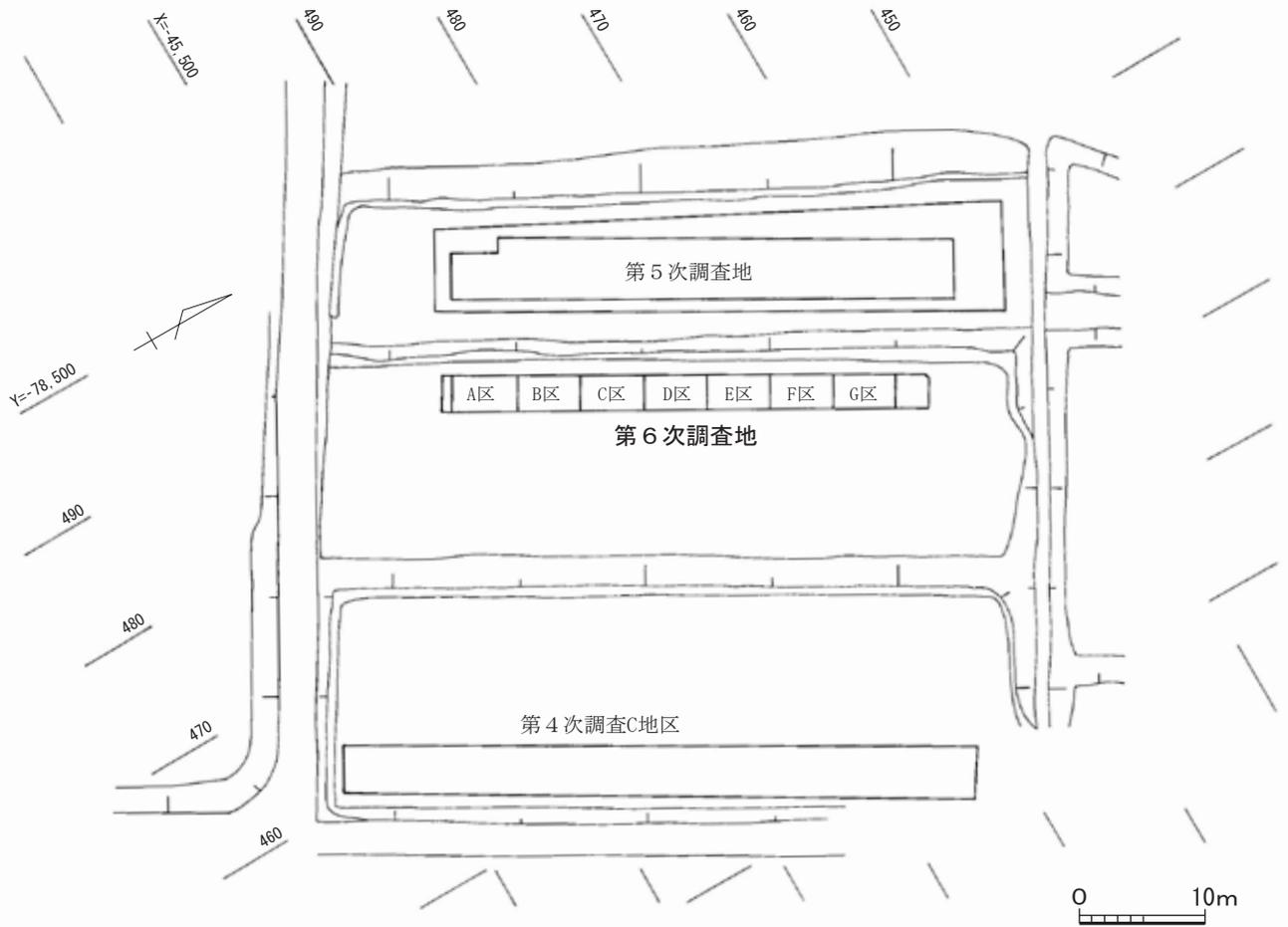


1 10YR3/1 黒褐色シルト(耕作土) 1b 7.5YR4/1 灰褐色砂質シルト 2 7.5YR4/1 褐灰色砂質シルト(旧耕作土) 2b 7.5YR6/6 橙色砂質シルト 2c 7.5YR6/2 灰褐色砂質シルト 2d 7.5YR7/2 明灰褐色砂質シルト 3 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト(上層包含層) 3b 7.5YR6/2 灰褐色砂質シルト 4 10YR4/1 褐灰色砂質シルト(下層包含層) 4b 10YR3/1 黒褐色砂質シルト 5 10YR3/2 黒褐色シルト混粘砂 6 10YR6/6 明黄褐色砂礫 6b 10YR6/5 にぶい黄褐色砂礫

第2図 調査トレンチ断面図(S=1/100)



第3図 調査地位置図(S=1/5,000)



第4図 調査トレンチ地区割図(S=1/1,000)

後述するようにA・B区の竪穴建物跡SI301は、第4層の除去作業中に床面と思われる粘土層を検出した。そのため、本来は第4層途中から掘り込んでいた可能性が考えられたことから、C～G区では第4層包含層掘削途中に何度か精査を行い遺構の検出につとめた。しかし断面観察では第4層を細分することができず、平面検出においてもB・E・F区において上層遺構と下層遺構の中間面に位置すると思われる柱穴をいくつか検出した以外に遺構は見られなかった。そのため、最終的にはH区より北西側の部分以外は第4層を細分できないものと判断した。

第5層は、厚さ約10～20cmを測り、全体的に拳大の礫を多く含む。府教委調査地(第5次調査)と同様に遺物は包含しないため、今回調査地のベースとなるものと判断した。

第6層は、トレンチ両端の断ち割りや、下層遺構の底部などにおいて確認したのみであるが、調査地全体のベースとなっている拳大～人頭大の礫を含む砂礫層である。扇状地性の砂礫層と見られ、遺物は包含しない。

(2) 上層遺構 (第5・6図)

調査地内の遺構は、第4層上面と第5層上面の2面が確認された。ここでは、前者を上層遺構、後者を下層遺構として報告する。遺構番号は、上層遺構に100～200番台を、下層遺構に300番台を与えた。

上層遺構は、第4層の黒ボク層上面を切り込む形で、B～H区において

- ①砂層を埋土とする流路跡SD101・110・233
- ②不明落ち込み遺構SX111・126・127・134・141・162
- ③土墳墓と思われる土墳SX112と性格不明の土墳SX226
- ④柱穴約120基、土墳1基
- ⑤耕作溝と思われる素掘り溝

を検出した。なお上層遺構の一部には、第4層掘削時に検出したものもある。

A・B区の上層遺構の大半は、重機掘削後の第3層掘削時に除去しており、主にC～H区にお

いて検出した。また不明落ち込み遺構下層の遺構は、落ち込み遺構埋土を除去した段階に初めて検出されたものが多い。切り合い関係から、さらに細分できる可能性があるが、ここでは一緒に報告する。

①流路跡

いずれも調査トレンチに平行ないしは直交する方向に検出した。

【流路SD101】

B～C区にかけて南西から北東方向に流れ、D区において北東方向に調査地外へのびる流路跡である。第4層を切り込んでおり、B区では幅0.5m・深さ0.1mの浅いものとして検出した。C区では、北方向へ屈曲し、幅0.8m・深さ0.1mと規模を拡大して調査地区外へ流れる。C区の一部は、重機掘削により除去してしまったため、平面検出ができなかった箇所がある。埋土は灰白色砂礫の単層である。切り合い関係にある柱穴は、すべてSD101を切っており、流路の方が古い。

出土遺物には、平安時代後期～鎌倉時代前期の土師器皿(5・11)・鍋(18)・羽釜、須恵器甕(25)、穿孔のある不明石製品(27)のほか、古墳時代後期末葉～飛鳥時代前期の土師器甕・高杯、須恵器杯身・高杯・壺・甕がある。

【流路SD110】

B～C区において検出した。大半が調査地区外に位置するもので、検出幅0.3m・深さ0.2mを測る。埋土は、灰白色砂礫層の単層である。不明落ち込み遺構SX127・柱穴とは切り合い関係にあり、いずれもSD110の方が古い。

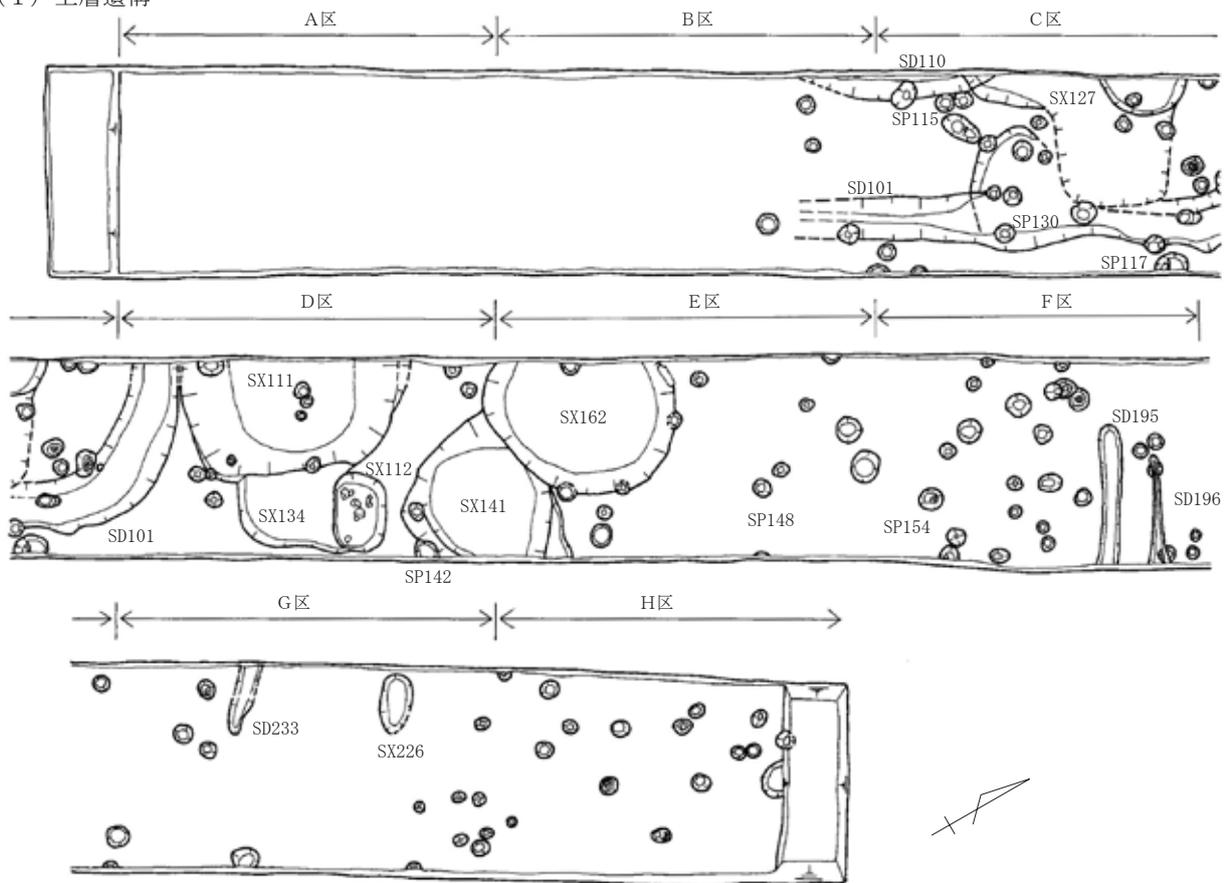
出土遺物には、平安時代後期～鎌倉時代前期の土師器皿(12)・陶器甕などがある。

【流路SD233】

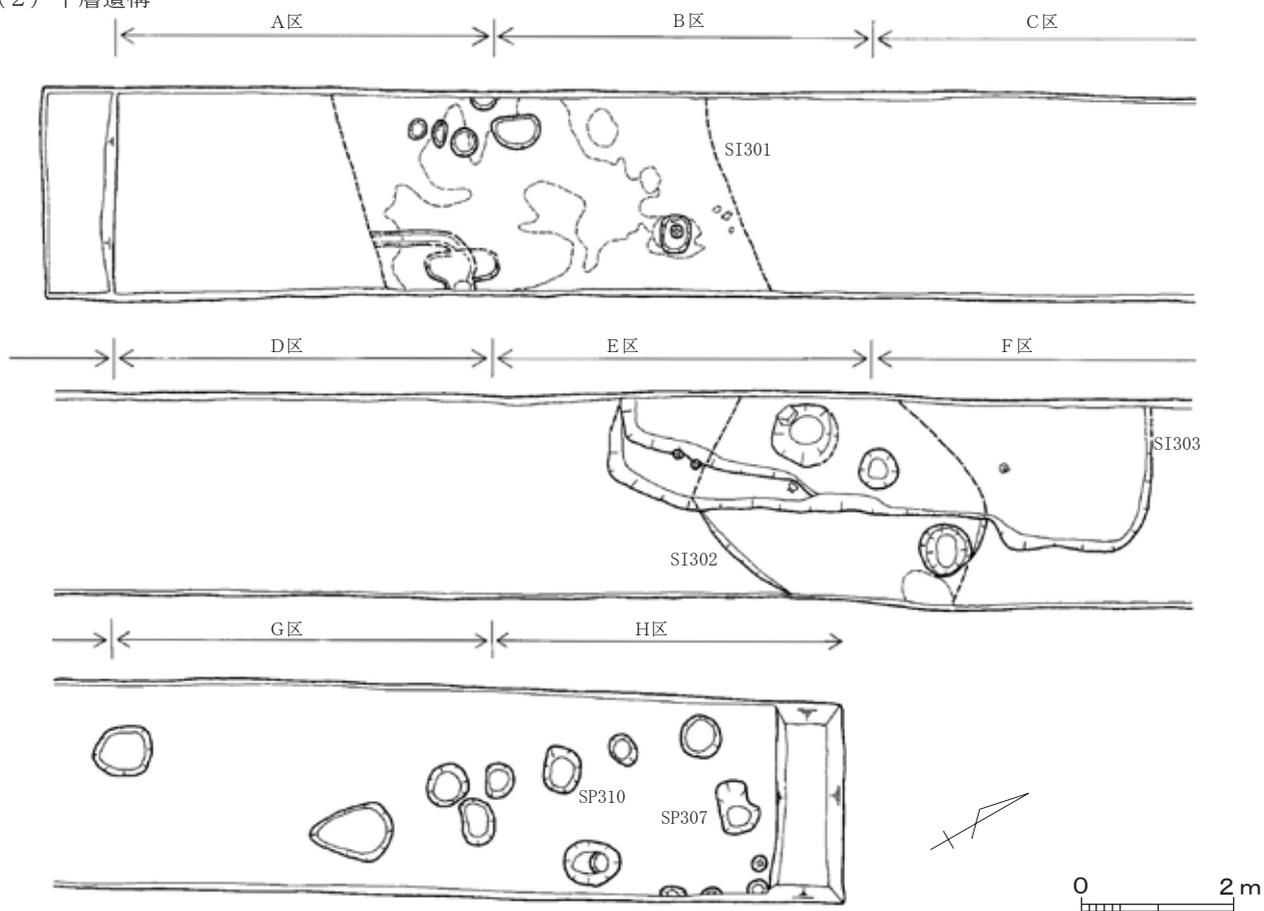
G区において検出した。北東方向に調査地区外へ流れる幅25cm、深さ25cmを測る流路跡である。埋土は上下2層あり、上層は明赤褐色砂礫、下層は褐灰色砂礫である。

出土遺物は、奈良時代の須恵器杯身のほか、須恵器・土師器の細片のみであった。

(1) 上層遺構



(2) 下層遺構



第5図 調査トレンチ平面図 (S=1/100)

②不明落ち込み遺構

SX111・126・127・134・141・162がある。

【不明落ち込み遺構SX111】

D区において検出した。北西側が調査地区外となるが、幅3m・深さ0.2mを測る。下層の埋土は、褐灰色砂質シルト～細砂層とSD101・110と同様の灰白色砂礫層からなる。ラミナ層が見られるため、当初はわずかに流水していたものと思われる。上層埋土は、隣接する不明落ち込みSX134と同様に3層に類似しており、両者の切り合い関係は不明である。埋土の状況から見て、湿地であった場所を整地したものと推定している。SD101との切り合い関係は、トレンチ壁面の攪乱部分と重複していたため明らかにできなかった。出土遺物には、重機掘削時に灰白色砂礫層から出土した土師器杯(21)のほか、平安時代後期～鎌倉時代前期の土師器皿(7・17)・瓦質土器鍋(19)、弥生時代後期の壺・高杯、古墳時代の土師器甕・須恵器甕などがある。

【不明落ち込み遺構SX126】

C区において検出した。SD110と重複するが、重複部分を重機掘削の際に掘削したため、切り合い関係は不明である。検出範囲では長辺1m以上、短辺1m程度を測る楕円形を呈する落ち込み遺構である。上層はSD110と同様の灰白色砂礫層であり、下層は灰白色砂～シルト層である。出土遺物には、平安時代後期～鎌倉時代前期の土師器皿(9)のほか、古墳時代の土師器甕・高杯、古墳時代～奈良時代の須恵器杯・杯蓋・甕の細片がある。

【不明落ち込み遺構SX127】

C区において検出した。上面を重機掘削の際に掘削したため、遺構の範囲は推定部分を含むが、長辺3m×短辺1.7m以上を測る不整形の落ち込みである。埋土は、灰褐色砂混シルトの単層である。出土遺物には、瓦質土器羽釜・土師器の細片がある。

【不明落ち込み遺構SX134】

D区において検出した長辺1.5m×短辺1mを測る楕円形の落ち込み遺構である。埋土は、灰褐色砂混シルトの単層であり、上面より土壌

SX112が切り込んでいるものと思われる。隣接するSX111上層埋土と同じため、切り合い関係は不明である。土壌SX112検出時まで3層掘削として遺物を取り上げていたため、本遺構からの出土遺物はD区3層からのものとして取り上げている。

【不明落ち込み遺構SX141】

D～E区において検出した長辺2m以上×短辺2mを測る楕円形の落ち込み遺構である。北側は、調査地区外に伸びる。埋土は、灰褐色砂混シルトの単層である。出土遺物には、弥生土器鉢・高杯、土師器壺・甕、須恵器の細片がある。

【不明落ち込みSX162】

E区において検出した長辺2.5m、短辺1.7m以上、深さ0.4mを測る楕円形状の落ち込みである。北東側は、調査地外へ伸びる。上端縁辺部には、径10～20cmを測る柱穴3基のほか、長さ30cm・幅10cmを測る石が見られ、不明落ち込み遺構と何らかの関係があるものと推定される。埋土上層は、3層に類似し4層がブロック状に混入する褐灰色砂質シルト層であり、底付近に細かい砂からシルト質の褐灰色砂質シルト層が4～10cmの厚さで堆積する。SX111と同様にラミナ層が見られるため、当初はわずかに滞水していたものと思われる。埋土から見て、湿地状の落ち込み部分を、上層遺構形成時に埋めて整地したものと推定される。

出土遺物には、平安時代後期～鎌倉時代前期の土師器皿(2・6・8・14)のほか、弥生土器蓋・壺、古墳時代の土師器二重口縁壺・甕・高杯・器台、須恵器杯身・高杯がある。

③土壌

D区において単独で検出したSX112と、G区において単独で検出したSX226がある。前者は土葬墓の可能性が考えられる。

【土壌SX112】

不明落ち込みSX134の埋土を除去した段階に検出した0.9m×0.7mを測る隅丸長方形の土壌である。本来は、SX134の埋土上層から切り込まれたものと思われる。埋土下層には5～15cmを測る石が含まれ、床面より逆位で鎌倉時代前期の土師器皿が1点(10)

出土している。石は、土壌底より少し浮いているため、土壌上面に置かれたものが落ち込んだものと思われる。埋土には、微量の炭が混じる。検出状況から見て土葬墓の可能性が考えられる。

【土壌SX226】

G区において検出した長辺0.8m・短辺0.4m・深さ0.2mを測る隅丸長方形の土壌である。埋土は、黄褐色粘土ブロックが混じる褐灰色砂質シルトである。出土遺物には、上面より黒色土器碗(24)が出土しているほか、土師器杯(22)、須恵器碗(23)がある。

④柱穴

B～H区全体より120基検出した。G区では、約1mの空白地帯が見られるが、おおむね調査地全体に確認できた。埋土は、3層ないしは3b層に近いものが多く、流路跡を切るものは流路埋土を含んでいるため砂質となる傾向がある。G・H区のもの、2d層を埋土とするものが多い。

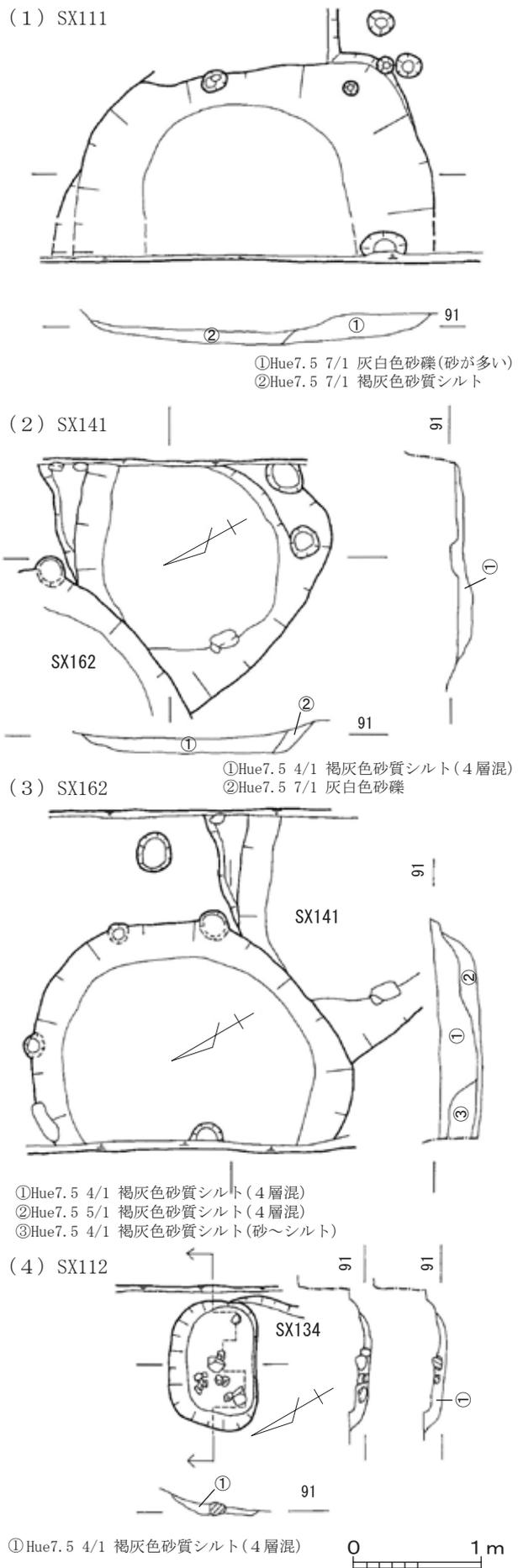
調査範囲が限られていたこともあり、掘立柱建物跡や柵列跡と認識できるものはなかった。また重複する柱穴では、埋土が極めて似ているため、切り合い関係を確認することが困難であった。

出土遺物は、いずれも細片であった。第8図に図化したものは、年代の判明するものである。出土遺物から見て平安時代後期～鎌倉時代前期の所産と思われる。

⑤耕作溝と思われる素掘り溝

素掘りの耕作溝と思われるものである。F区においてSD195・196の2条検出している。残りの良いSD195は、幅45cm・残存長1.8m、深さ7cmを測る。2層を埋土とする。柱穴と切り合い関係にあり、いずれも柱穴より新しい。

上層遺構は、遺構および第3層出土遺物から見て、平安時代中期～鎌倉時代前期の所産と見られる。



第6図 上層遺構平面図(S=1/50)

(3)下層遺構 (第5・7図)

上層遺構の調査終了後、第4層の掘削作業に入り、下層遺構の検出につとめた。第4層は、先述したように、弥生時代後期～奈良時代の遺物を大量に包含する。下層遺構は、これらの年代が想定された。

最初に掘削したC区では、第4層除去後の第5層上面において遺構が明瞭に見られなかったため、第6層上面まで掘削して遺構検出を試みたが、明確な遺構は見られなかった。

その後に掘削を行ったA・B区でのうち、B区では第4層途中に黄褐色粘土層が面的に分布する状況が見られたため、ここで掘削を止め遺構検出を行った。黄褐色粘土層は、幅5mの範囲に厚さ5～6cmで見られ、竪穴建物の貼り床と推定された。そのためトレンチ壁面において竪穴建物の立ち上がりの確認を行ったものの、明瞭な土色変化が見られなかった。この点から、D～H区については、第4層掘削途中の段階においても、数回、遺構検出につとめた。その結果、B・E・F区において、第4層途中のレベルで柱穴を数基検出した。そのため、本来は、第4層の中間レベル遺構面が存在する可能性が考えられた。しかし、他の地区では遺構と思われるものが見当たらず、結果的には、第5層上面まで掘削したところで竪穴建物跡と思われる落ち込みや柱穴跡などの遺構を検出した(E～G区)。包含層(第4層)からの出土遺物の中で特徴的なものとしては、C区出土の円面硯(125)1点がある。

【竪穴建物跡SI301】

B区において検出した竪穴建物跡と思われる遺構である。床面に貼られた粘土層のみを検出しており、壁面では明瞭に掘り込みを確認できなかった。上面は、すでに削平を受けているものと推定される。

第4層掘削時に粘土層の一部を掘削してしまったため正確な大きさは不明であるが、トレンチ断面の粘土層分布や平面検出プランから見ると、一辺4.65m×2.8m以上を測る方形の竪穴建物跡と推定される。床面には、赤変した粘土が5箇所確認できた。う

ち1箇所は、赤変箇所の前面に炭混じりの穴が見られ、造り付けのカマド跡と推定される。ほかの赤変箇所は炉跡と推定される。

床面の黄褐色粘土層を除去後、精査を行った結果、柱穴状の遺構を5箇所検出した。うちP1・P2は、長辺0.5～0.6m・短辺0.4～0.5mを測る方形の掘り方をもつものであり、主柱穴と思われるものである。ほかは、径0.4m以下の小さなものであり、床面粘土層を貼る前の凹凸の可能性がある。

遺構検出時に床面の粘土層に到達していたため、建物跡に伴う出土遺物は少ない。トレンチ断面にて確認した遺物や柱穴出土遺物などの状況から見て、古墳時代後期末葉～飛鳥時代前期の所産と推定している。

【竪穴建物跡SI302】

E区第5層上面において、わずかに粘土層を確認したため検出した方形の竪穴建物跡と思われる遺構である。平面検出の際に粘土層の大部分を除去してしまっていたため、トレンチ壁面の粘土層分布等から、規模は3.6m×2.9mと推定している。明確な遺構出土遺物を確認できていないが、E・F区断ち割り出土土器や遺構の検出状況等から見てSI301と同時期のものと推定している。柱穴SP319は、この建物跡に伴う可能性がある。

【竪穴建物跡SI303】

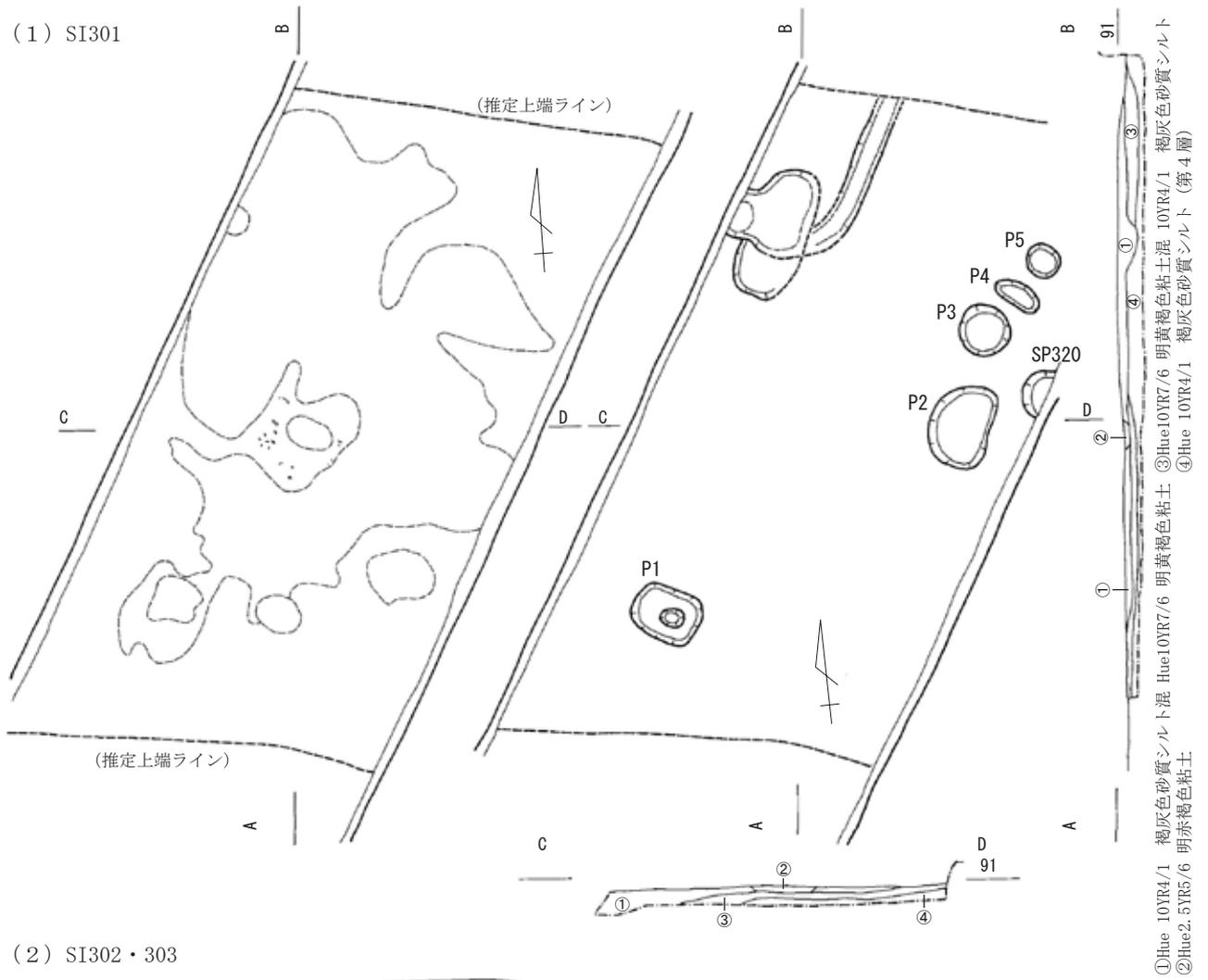
E・F区第5層上面において検出した。一辺は調査地区外に伸びるが、長さ7.1m×1.9m以上を測る。SI301・302とは異なり、床面に粘土層は見られなかったため、竪穴建物跡とするには疑問も残る。

床面からは、柱穴または土坑と思われるものを2箇所検出している。

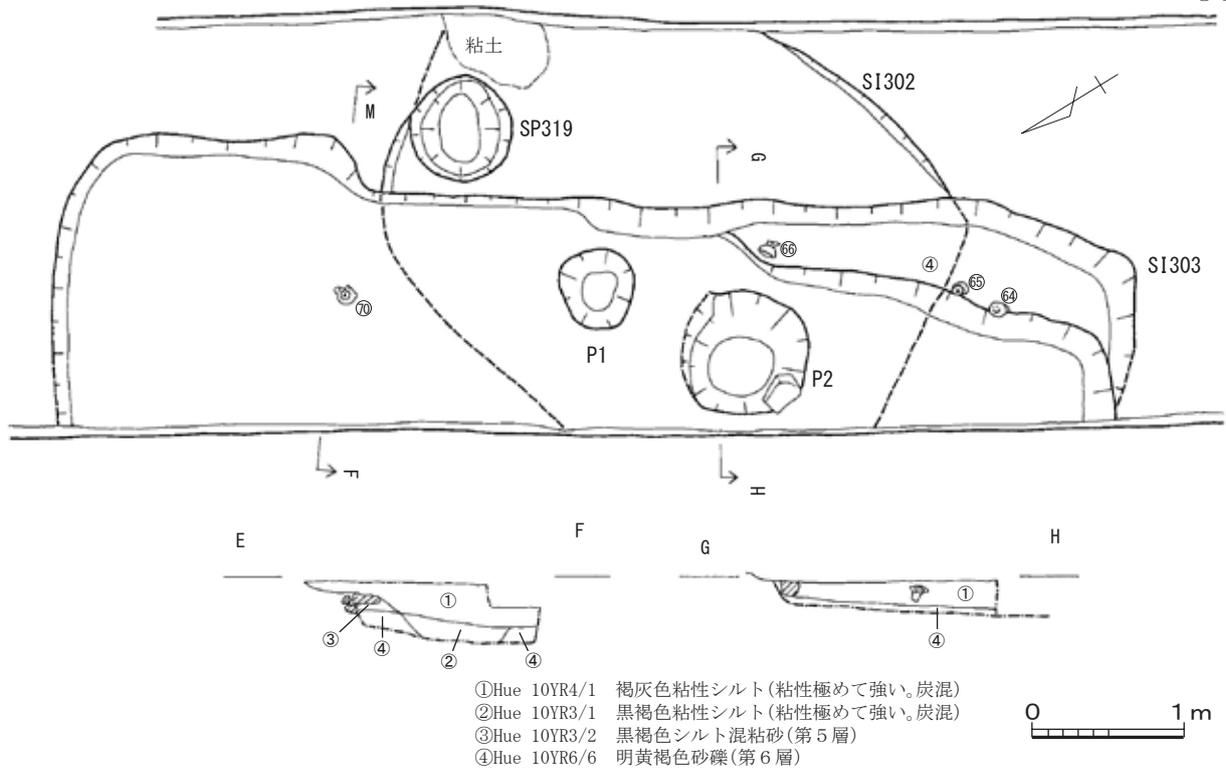
【柱穴】

G・H区において14基検出した土坑または柱穴と思われるものである。円形・楕円形ないしは隅丸長方形を呈する。埋土は、かなり粘性の強いものであり、検出時に容易に判別できた。出土遺物は少ないが、飛鳥～奈良時代の所産と推定される。

(1) SI301



(2) SI302・303



第7図 下層遺構平面図(S=1/50)

第4章 出土遺物

今回の調査では、コンテナ20箱分の遺物が出土しており、調査面積に比して遺物量が多かった。そのため整理作業は、

①すべての遺物の洗浄を行う。

②①の後に、口縁端部・脚端部などが残存する資料および遺構や包含層の形成年代がわかる特徴的な資料を中心に第1次のピックアップを行う。

③②の中からさらに選別を行い、遺物実測を行う。という方法で行った。

なお遺物実測に際して、遺構出土のものは、年代の判明する特徴的な資料であれば細片であっても実測を行った。これに対して包含層出土遺物は、包含層形成年代の判明する特徴的な遺物に絞って実測を行った。

(1) 上層遺構 (第8図)

上層遺構からの出土遺物は、コンテナ2箱分あった。下層包含層(第4層)に含まれる弥生時代後期～奈良時代の遺物を多く含むが、遺構の時期を示す平安時代中期～鎌倉時代の遺物を中心に図化した。各遺構の出土遺物は少量であるため、報告は種類別に行うこととし、出土遺構については第8図下に示した。

【土師器】

皿(1～17)、杯(21・22)、鍋(18)がある。

皿は、手づくねのもの(1～13)のほか、回転台成形し、底部を糸切りするもの(14～17)がある。手づくねのものは、口縁端部を二段ナデするもの(1)、内湾した後に端部を外反させるもの(3～9)、端部を丸くおさめるもの(9～13)がある。回転台成形のものは、口縁端部が外反するもの(14・16)と丸くおさめるもの(15)がある。2・8は、内面にススが付着する。

杯は、いずれも軟質で内外面ともに風化が著しいが、回転台成形のものである。内湾気味に端部を丸くおさめるもの(21)、端部を外反するもの(22)がある。

鍋(18)は、内湾する口縁部の破片であり、端部は外傾する面をもつ。外面にススが付着する。

【瓦質土器】

鍋(19・20)がある。いずれも内湾する口縁部の破片であり、端部は平らな面をもつ。外面にはススが付着する。

【黒色土器】

内湾気味に立ち上がる口縁をもつ椀(24)がある。外面は磨滅が著しい。内面のみ黒色化しており、ヘラ磨き痕が残る。

【須恵器】

端部を外反する椀(23)がある。

【青磁】

龍泉窯の椀(26)がある。

【石製品】

不明石製品(27)がある。残存長3.3cm・幅2.7cm・厚さ3mmを測る滑石製のものであり、径約6mmを測る円孔が見られる。温石とするには薄いため用途は不明である。

上層遺構からの出土遺物は、回転台成形の土師器杯(21・22)および須恵器椀(23)が10世紀(平安時代中期)、口縁端部を二段ナデする土師器皿(1)が12世紀前葉～中葉にさかのぼるほかは、12世紀後葉～13世紀(平安時代後期～鎌倉時代前期)の所産と見られる。

(2) 上層包含層(第2・3層) (第8図)

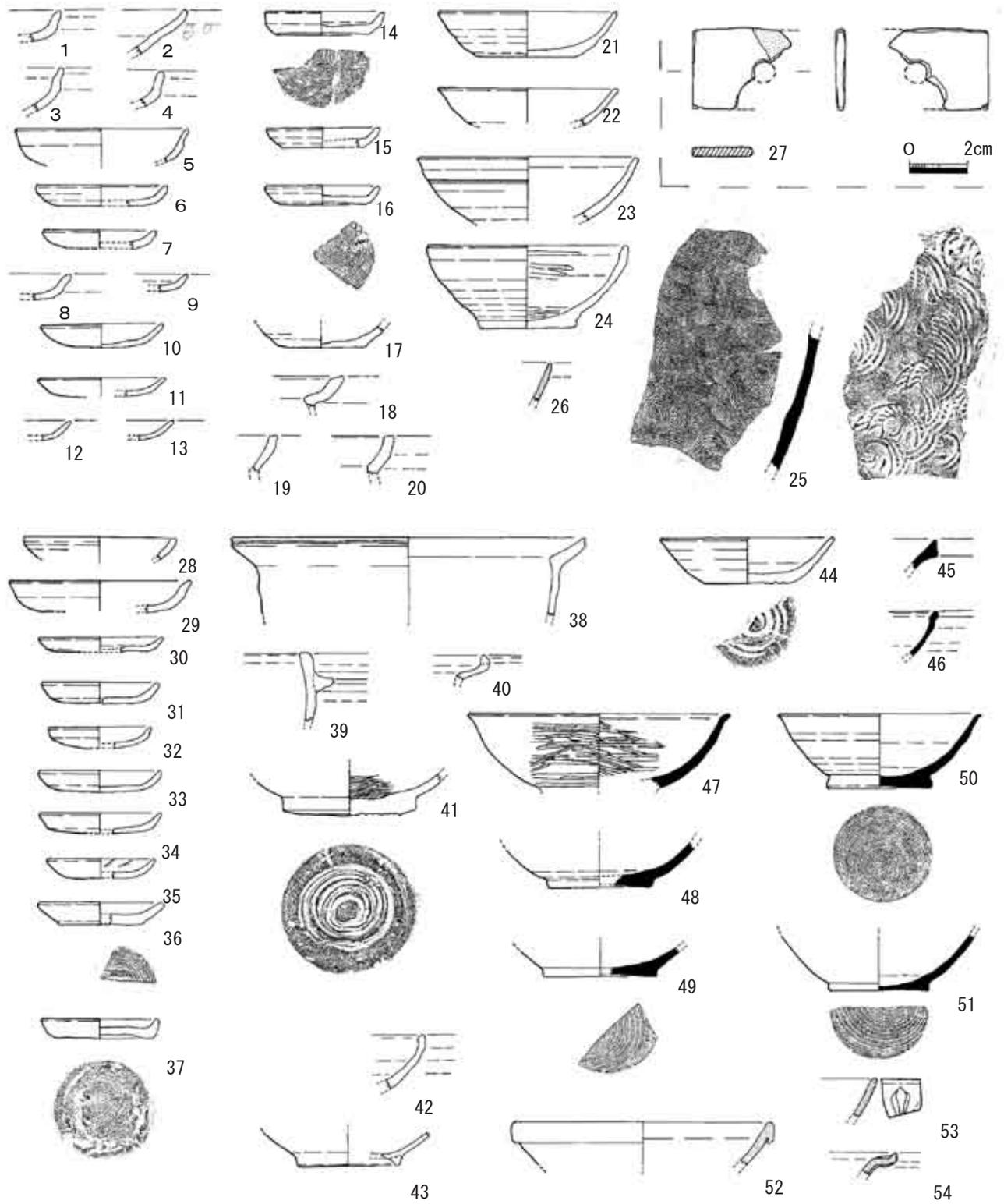
上層包含層(第2・3層)からの出土遺物は、コンテナ2箱分あった。

下層包含層(第4層)に含まれる弥生時代後期～奈良時代の遺物を多く含むが、ここでは上層遺構の時期を示す平安時代中期～鎌倉時代の遺物を中心に図化した。

【土師器】

皿(28～37)、杯(44)、羽釜(39)がある。

皿はづくねのもの(28～35)のほか、回転台成形し、底部を糸切りするもの(36～37)がある。手



土師器〔皿(1~17、28~37)、杯(21・22・44)、鍋(18)・羽釜(39)〕、瓦質土器〔鍋(19・20・38・40)〕、
 黑色土器〔椀(24・41)〕、瓦器〔椀(42・43)〕、須恵器〔椀(23・46~51)、甕(25)〕、
 青磁〔椀(26・53)、皿(54)〕、白磁〔椀(52)〕、不明石製品(27)
 SD101(5・11・18・25・27)、SD110(12)、SX111(7・17・19・21)、SX126(9・13)、
 SX162〔上層(2・6・8)、下層(14)〕、SX112(10)、SX226(22~24)、C区SP115(15・16)、
 C区SP117(20)、C区SP130(3)、D区SP142(4)、E区SP148(1)、F区SP154(26)、
 包含層〔B区(33)、C区(28・40・53)、D区(30・32・35~38)、E区(29・31・34・39・43・45・52・54)、
 G区(41・42・44・46・48・49)、H区(47・50・51)〕

第8図 上層遺構・包含層出土遺物実測図

づくねのものは、口縁端部を二段ナデするもの(28)、内湾した後に端部を外反させるもの(29～32)、端部を丸くおさめるもの(33～35)がある。回転台成形のものは、口縁部が外側へひらくもの(36)と直立気味に立ち上がるもの(37)がある。

杯(44)は、回転台成形により内湾気味に立ちあがり、底部をへら切りするものである。

羽釜(39)は、わずかに内湾気味に直立し、鏝を貼り付けるものである。鏝部下側から体部外面にはススが付着する。

【須恵器】

椀(46～51)がある。口縁部が残存するものは、いずれも端部を外反する。底部残存個体は、蛇の目高台のもの(48)を除き、いずれも糸切りするものである。なお47は、内外面ともにへらミガキされており、緑釉陶器の素地とされるものである。

【黒色土器】

椀(41)底部片がある。内面のみ黒色化する。底部は、同心円状の紋様が見られる。

【瓦質土器】

鍋(38・40)がある。38は、口縁を外反するものである。外面にはススが付着する。40は、口縁が外反した後、端部を内側へ折り曲げるものである。

【瓦器】

椀(42・43)がある。42は、内湾気味に立ち上る口縁をもち、端部は内側に肥厚する。43は貼り付け高台を有する底部の破片である。いずれもその特徴から見て、丹波型瓦器椀である。

【青磁】

椀(53)および皿(54)がある。いずれも龍泉窯のものであり、53は外面に鑄蓮弁文をほどこす。ほかに図化できなかったが写真図版に示したものが2点あり、いずれも龍泉窯系の製品である。

【白磁】

玉縁状の口縁をもち、椀(52)がある。上層包含層からの出土遺物は、緑釉陶器の素地とされる須恵器椀(47)や蛇の目高台を有する椀(48)が9世紀後葉(平安時代前期)、糸切底の須恵器椀(49～51)や回転台成形の土師器杯(44)が10世紀(平安時代中期)、口縁端部を二段ナデする土師器皿(28)が12世紀前葉～中葉にさかのぼるほかは、12世紀後葉～13世紀(平安時代後期～鎌倉時代前期)

の所産と見られる。

(3) 下層遺構 (第9図)

下層遺構からの出土遺物は、コンテナ4箱分あった。以下では、遺構ごとに報告する。

① 竪穴建物跡SI301

【土師器】

甕(55・56)・甑(57)がある。甕は、口縁が大きく外反するもの(55)と、短く外反する小型のもの(56)がある。甑は、口縁部のみの破片である。外面はハケ、内面はへら削り調整をほどこす。

【須恵器】

鉢(58)・高杯(59)・杯身(60)がある。

鉢は、内湾気味にたちあがり、端部に外傾する面をもつ。外面には、斜格子文をほどこす。高杯は、短脚高杯の脚部の破片であり、透かしを有する。杯身は、端部を欠損するものの、立ち上がり・受部ともに短いものである。

② 柱穴

SP307(62)・SP310(61・63)出土のものを図化した。

【土師器】

甕(61)は、56と同様に短く外反する口縁をもつ小型のものである。

【須恵器】

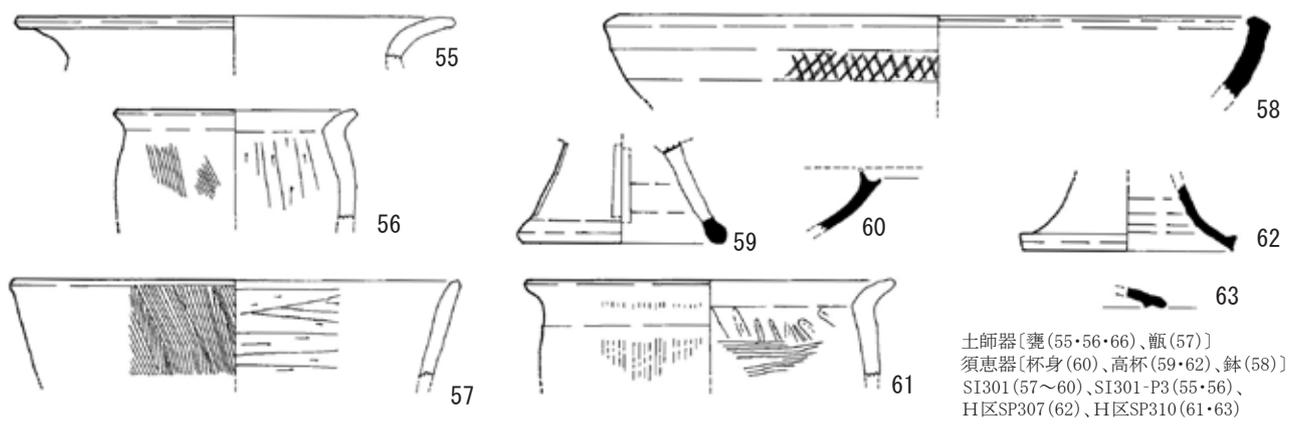
高杯(61)・杯蓋(63)がある。高杯は、脚部のみの小破片である。内外面ともに自然釉が付着する。杯蓋は、内面にかえりを有するものである。

SI301および柱穴出土遺物は、その特徴から古墳時代後期後葉～飛鳥時代前期の所産と思われる。

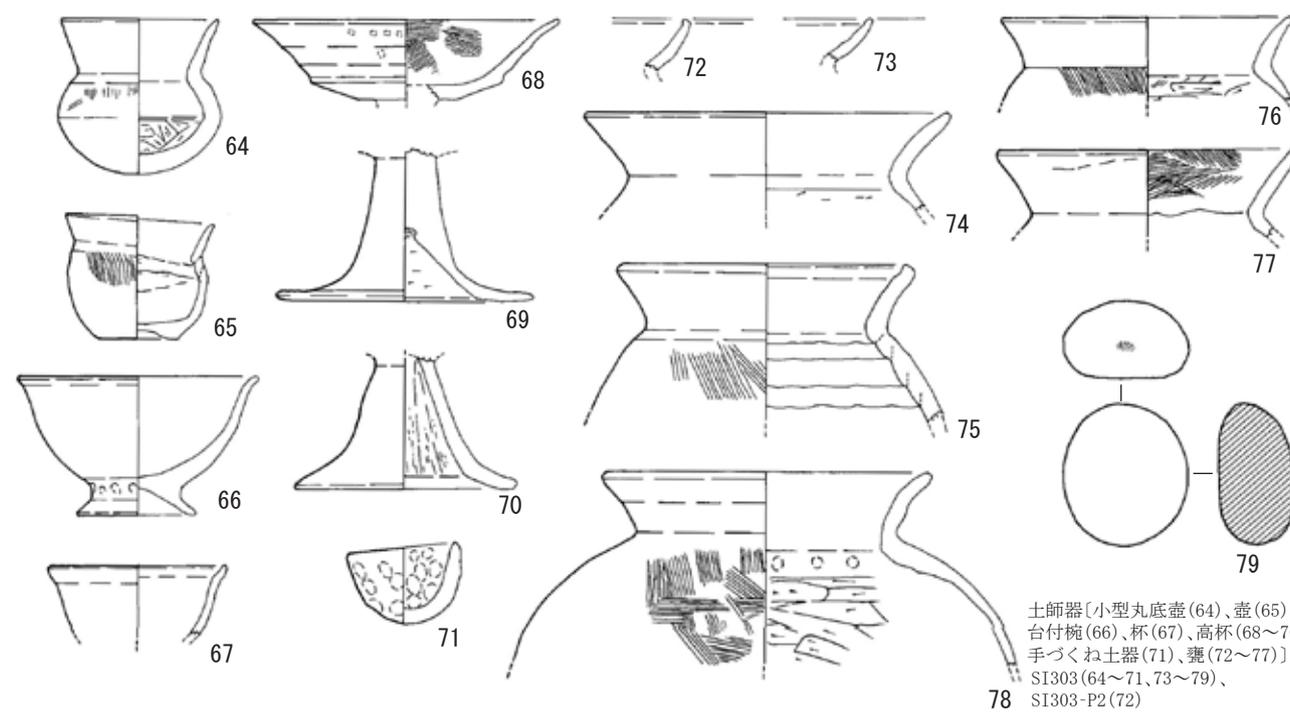
③ 竪穴建物跡SI303

【土師器】

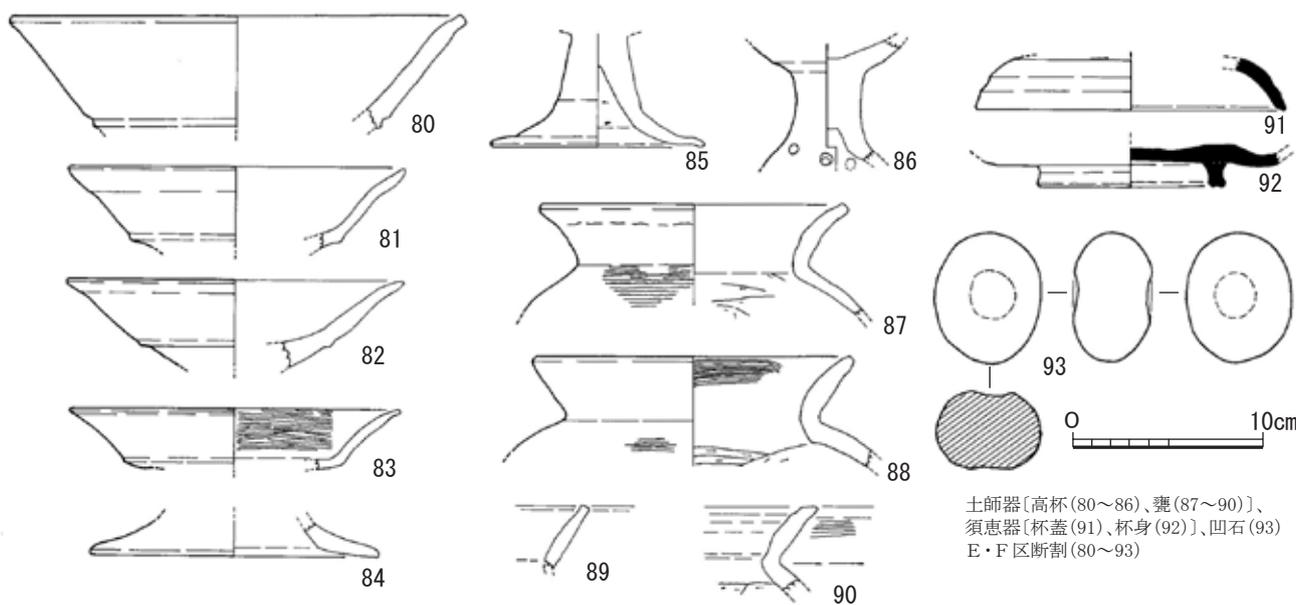
小型丸底壺(64)・壺(65)・台付椀(66)・杯(67)・高杯(68～70)・ミニチュア土器(71)・甕(72～77)がある。小型丸底壺は、球状の体部に上外方へのびる口縁をもつ。粗製であり、特に体～底部は分



土師器〔甕(55・56・66)、甑(57)〕
 須恵器〔杯身(60)、高杯(59・62)、鉢(58)〕
 SI301(57~60)、SI301-P3(55・56)、
 H区SP307(62)、H区SP310(61・63)



土師器〔小型丸底壺(64)、壺(65)、
 台付碗(66)、杯(67)、高杯(68~70)、
 手づくね土器(71)、甕(72~77)〕
 SI303(64~71、73~79)、
 SI303-P2(72)



土師器〔高杯(80~86)、甕(87~90)〕、
 須恵器〔杯蓋(91)、杯身(92)〕、凹石(93)
 E・F区断割(80~93)

第9図 下層遺構出土遺物実測図

厚い。

壺は、一見すると小型丸底壺のように見えるが、平らな底部は中央をくぼませ高台状にする。台付椀は、短い脚部から内湾気味にのびる口縁をもち、端部は外反する。高杯は、外反する口縁をもち内面はハケ調整するもの(68)、中実で脚端部内面に横方向のヘラ削りを施すもの(69)、中空の脚部片で内面に縦方向のヘラ削りを施すもの(70)がある。ミニチュア土器は、内外面ともに指頭圧痕を顕著に残す。甕は、端部を内面に折り返す布留系のもの(72・73)のほかは、外湾ないしは外反する口縁をもつものである。75は体部内面の粘土紐継ぎ目痕が顕著である。

【石製品】

赤変箇所が見られる叩き石(79)がある。

SI303出土遺物は、その特徴から、古墳時代中期前葉の所産と推定される。

④E・F区断ち割り (第9図)

SI302・303が所在するE・F区に入れたトレンチ断ち割りから出土した遺物は、ローリングを受けていないものが多く、両遺構に伴う可能性がある資料である。そこで包含層出土遺物とは別に報告することとした。

【土師器】

高杯(80～86)・甕(87～90)がある。

高杯の口縁部が残る破片(80～83)は、いずれも杯部と口縁部の境界付近に段をもち、口縁は外上方にのびた後に端部を外反するものである。83の内面にはハケ目が残る。脚部破片のうち86は、脚部に円孔が見られる。甕は、口縁部が外湾ないしは外反するものである。89は口縁端部内面をわずかに肥厚する。90は、口縁部内面に段を有する、いわゆる「青野型」甕^(註16)と呼ばれるものである。

【須恵器】

杯蓋(91)・杯身(92)がある。杯蓋は、端部内面に凹みをもつものである。杯身は、貼り付け高台を有する。

【石製品】

内外面ともに使用痕がある凹石(93)がある。

(4)下層包含層(第4層) (第10・11図)

下層包含層(第4層)からの出土遺物は、コンテナ14箱あった。遺物の年代観や特徴が判明し、遺跡の存続年代や包含層の形成時期が判明するものを中心にピックアップして実測した。

【土師器】

杯(94～102)、小型丸底壺(103・104)、高杯(105・106)、器台(107)、甕(108～112)を図化した。ほかに竈形土製品の破片が見られた。

杯は、畿内産と思われる暗文を有するもの(101・102)を除き、在地産のものである。後者には、赤色顔料を塗布するもの(94～98)がある。いずれも口縁は、内湾気味に上方にのびるが、端部を丸くおさめるもの(94・99・100)、外反気味におさめるもの(95・97)、内湾気味におさめるもの(96・98)がある。調整は、内外面ともにハケ目が残るものが多く、一部にヘラ削りによるものがある。小型丸底壺は、いずれも粗製のものであり、口縁が外反するもの(103)と上外方にのびるもの(104)がある。高杯は、杯部と口縁部の境に段をもち外上方に口縁がのびるもの(105)と、椀状の杯部に中実の脚部が取り付くもの(106)がある。105の脚柱部は、外面をヘラミガキ、内面を横方向にヘラ削りする。

器台(107)は、山陰系の鼓形器台である。

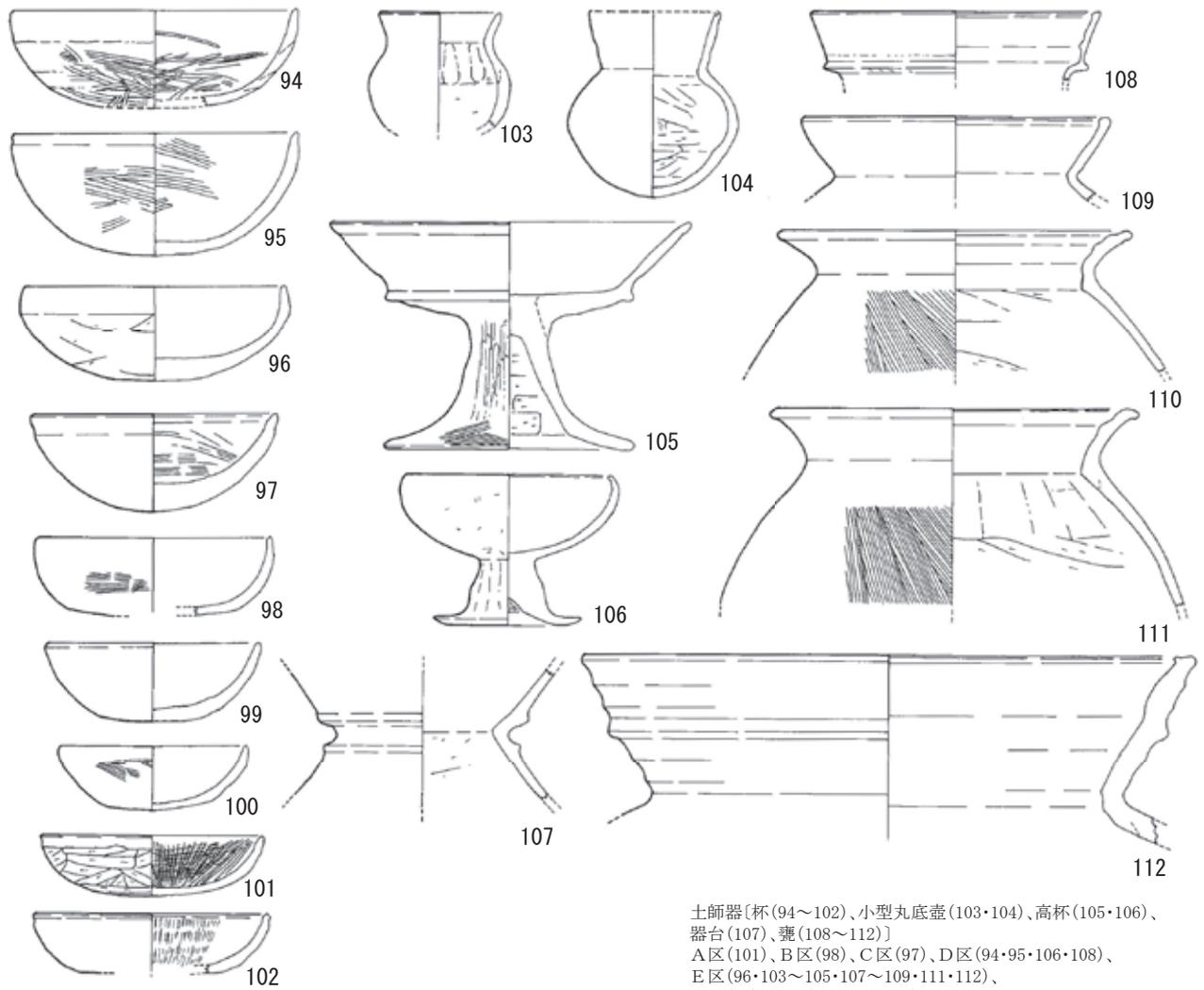
甕は、二重口縁をもつもの(108)、口縁部中位で傾斜を変える大型のもの(112)、内面を折り返す布留系のもの(109)、口縁部内面に段を有するいわゆる「青野型」甕と呼ばれるもの(110・111)がある。

【須恵器】

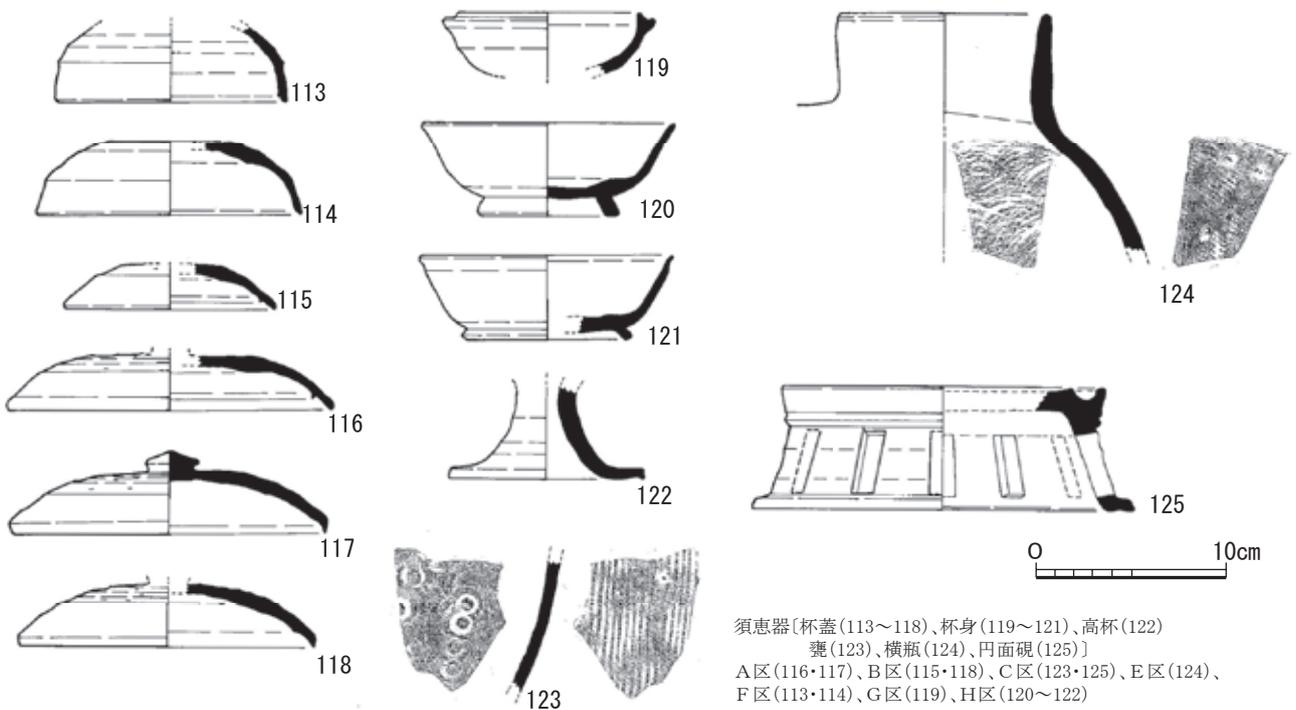
杯蓋(113～118)、杯身(119～121)、高杯(122)、甕(123)、横瓶(124)、円面硯(125)がある。

杯蓋は、蓋杯に伴うもの(113・114)と、高台付杯に伴うもの(115～118)がある。113は、口縁部と天井部の境界がわずかに突出し、口縁端部内面には凹みがある。114は、天井部外面に窯壁の小片が付着する。115・116は内面にかえりを有し、117・118はかえりが見られない。

杯身は、蓋杯の身(119)と高台付杯(120・121)



土師器〔杯(94~102)、小型丸底壺(103・104)、高杯(105・106)、器台(107)、甕(108~112)〕
 A区(101)、B区(98)、C区(97)、D区(94・95・106・108)、
 E区(96・103~105・107~109・111・112)、
 G区(99)、H区(100・102・110)



須恵器〔杯蓋(113~118)、杯身(119~121)、高杯(122)〕
 甕(123)、横瓶(124)、円面甕(125)〕
 A区(116・117)、B区(115・118)、C区(123・125)、E区(124)、
 F区(113・114)、G区(119)、H区(120~122)

第10図 下層包含層出土遺物実測図

がある。119は立ち上がり・受部ともに短いものである。120は、灰白色の非常に軟質のものである。121は、外下方にのびる高台を貼り付ける。高杯(122)は短脚のものであり、透かしは見られない。甕(123)は、内面に同心円状の当て具痕をもつ。

横瓶(124)は、口縁部付近のみの破片である。口縁部外面には、斜め方向に自然釉が一条かかる。

円面硯(125)は、硯部から脚部にかけての一部の破片であるが、全体の形状が判明する資料である。硯部・受部の立ち上がりは低い。脚部には、長方形の透かしがほどこされ、外反した後にはわずかに端部を下側へ折り曲げる。

【弥生土器】

高杯(126・127)、器台(128・129)、鉢(130)、蓋(131・132)、甕(133～135)を図化した。

高杯は、外上方にのびた後に端部を上方へ折り曲げ、内外面ともに丁寧にヘラ磨きするもの(126)と、外反する口縁に上外方へ外湾気味にのびる端部をもつもの(127)がある。

器台は、受部内外面および脚部外面を丁寧にヘラ磨きするもの(128)と、脚部内外面をハケ調整し、透かしを施すもの(129)がある。

鉢(130)は、平らな底部から内湾気味にのびる口縁をもち、端部は内湾気味に丸くおさめる。

蓋は、小型のもの(132)内外面ともにハケ調整を行う大型のもの(131)がある。

甕は、内傾する口縁端部に凹線を施すもの(133)、外傾する面に擬凹線を施すもの(134)、134と端部形状は似ているものの擬凹線をもたないもの(135)がある。

【石製品】

砥石(136)、石斧(137)、石鋸(138)を図化した。砥石は9面に使用痕が残る。石斧は、下部を破損するが小型のものである。石鋸(138)は、破損しているもの結晶片岩製のものである。玉作りに伴うものの可能性があるが、碧玉や緑色凝灰岩などの原石・未成品等は見られなかった。

下層包含層出土遺物は、弥生時代後期から奈良時代の各時期のものが含まれている。

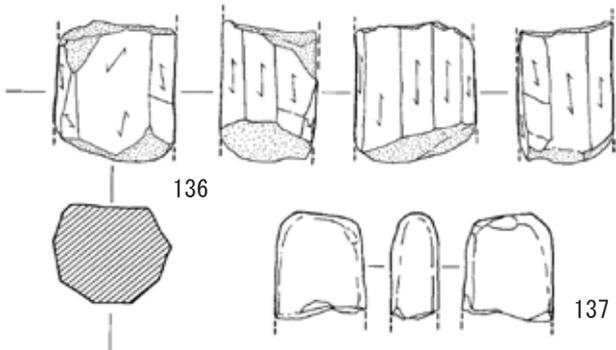
弥生時代の土器は、後期前葉と思われる高杯(126)や甕(133)が見られるほか、後期中葉～後葉と思われる高杯(127)、甕(134・135)を含む。

古墳時代では、下層遺構のSI301に併行すると思われるもの(103～105、107～109・112)が目立つ。そのほかには、須恵器杯蓋(113)と併行する可能性のある高杯(106)があり、古墳時代後期前葉の土器が含まれる。土師器杯(94～100)は、古墳時代後期前葉から飛鳥時代にかけての所産と思われる、主体は飛鳥時代のものと思われる。

飛鳥・奈良時代には、須恵器杯蓋(115～118)、杯身(120～121)があり、おおむね奈良時代前葉～中葉を下限とするものと評価できる。円面硯(125)や口縁部内面に段を有するいわゆる「青野型」と呼ばれる土師器甕(110・111)も当該期のものと推定される。

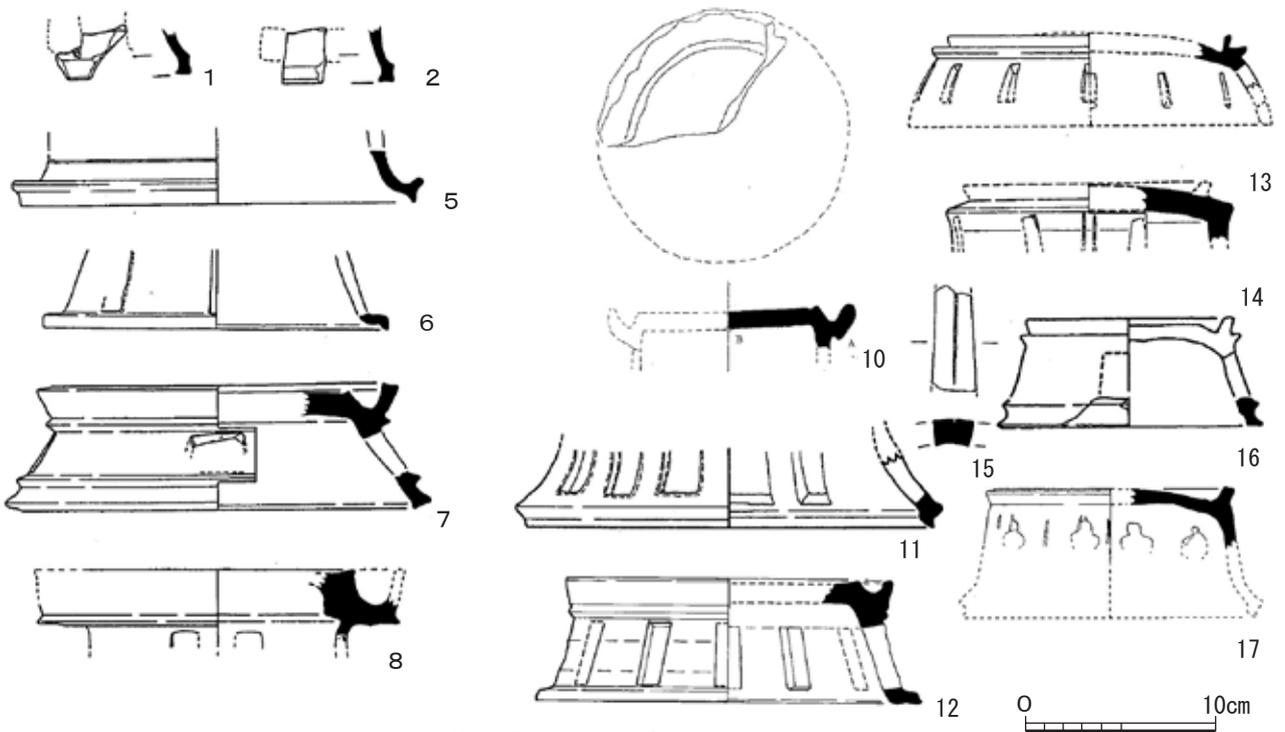


弥生土器〔高杯(126・127)、器台(128・129)、鉢(130)、蓋(131・132)、甕(133~135)〕
A区(131)、C区(134)、B区(126~128・130・132・135)、F区(129・133)



砥石(136)、石斧(137)、石鋸(138)
C区(136)、E区(137)、F区(138)

第11図 下層包含層出土遺物実測図



第12図 丹後地域出土の円面碗

第5章 総括

(1) 円面硯について (第12図)

今回調査の出土遺物の中で特筆すべきものとしては、須恵器円面硯が挙げられる。

古代の丹後国内からは、過去の調査や表採資料として14遺跡(うち1は出土地不明)18点の円面硯の出土が知られており、松山遺跡の事例で16例目となった^(註17)。これまでは、熊野郡・竹野郡・与謝郡・加佐郡からの出土が知られていたが、松山遺跡の所在する丹波郡内では、須恵器杯や杯蓋を硯に転用した転用硯が正垣遺跡^(註18)・枯木谷遺跡^(註19)より出土していたことが知られるのみであり、円面硯は初めての出土事例となった。

次に形状の特徴を比較してみたい。

硯部から脚部までの形状が判明する資料は、浅後谷南遺跡(7)が見られるのみであり、松山遺跡の事例は小片ながらも形状が判明する点から貴重である。浅後谷南遺跡(7)と比較すると、松山遺跡のもの(12)は脚径に比して器高が高く、脚部の内傾度が低いという特徴がある。硯部の立ち上がりは、浅後谷南遺跡(8)と比較して低いものであり、浅後谷南遺跡(7)や竹野遺跡(10)と同様のものである。受部の立ち上がりは、浅後谷南遺跡(7)と比較して低いものであり、竹野遺跡(10)と同様のものである。脚部は、岩木遺跡(6)と同様に外反し、端部を下側へ折り曲げるものである。透かし孔は、長方形のものであり、田畔遺跡(18)の事例を除き、過去の出土事例と同様のものである。

過去の調査事例の大半が包含層出土のものであるため、共伴資料から年代が判明するものはみられないが、年代的には、おおむね奈良時代のものであると思われる。松山遺跡出土資料についても包含層出土資料のため年代は不詳であるが、下層包含層(第4層)の下限年代から奈良時代前葉～中葉のものとして見て大過なからう。墨書土器は見られなかったが、奈良時代の松山遺跡に識字層が居住していたことを示す資料として評価できる。

番号	郡名	遺跡名	出土位置	番号	文献
1	熊野郡	こくばら野遺跡	竪5埋土	62-29	①
2			包含層	72-173	
3		(佐濃小学校所蔵資料)			②
4		湯舟坂遺跡	表採		③
5	竹野郡	横枕遺跡		26-89	④
6		浅後谷南遺跡	包含層	120-28	⑤
7			包含層	120-29	
8			暗褐色土	140-123	
9		遠處遺跡	包含層	P 68-3	⑥
10		竹野遺跡		第2図2	⑦
11		岩木遺跡	包含層	14-108	⑧
12	丹波郡	松山遺跡	包含層	10-125	
13	与謝郡	難波野条里遺跡	第1トレンチ	8-19	⑨
14		難波野遺跡	SE03木枠内	21-73	⑩
15				21-74	
16		丹後国分寺跡		11-12	⑪
17		中野遺跡			
18	加佐郡	田畔遺跡		31-193	⑫

丹後地域出土円面硯一覧表

(第12図に対応、文献は註20)

(2) 総括

今回の第6次調査では、調査面積は狭小であったものの、上層および下層の2時期の遺構を確認したほか、コンテナ20箱におよぶ遺物が出土し、遺跡の存続年代や性格を考える上で貴重な資料を得ることができた。

上層遺構は、大半が柱穴と不明落ち込み遺構であった。遺構出土土器および上層包含層出土遺物から見ると、遺構の時期は、平安時代後期～鎌倉時代(12～13世紀)と平安時代前～中期(9～10世紀)のおおむね2時期に分けることが可能である。前者は、調査地全体にわたって分布するが、後者は不明落ち込み遺構SX111出土の土師器杯(21)を除き、調査地北西側のF～G区に分布する。上層の2・3層の分布がF区を境界にして異なり、旧地形が北西側に向って下っていくことと関係するものと思われる。ほかに墓と思われる土壌SX112があり、墓であるならばいわゆる「屋敷墓」と呼ばれるものとなる。

下層遺構は、古墳時代後期末葉～飛鳥時代前葉にかけての竪穴建物跡と思われる遺構、飛鳥時代と思われる柱穴のほか、古墳時代中期前葉と推定される竪穴建物跡と思われる遺構が見られた。下層包含層の第4層からは、遺構の時期のほかにも、奈良時代、古墳時代後期前葉、弥生時代後期の遺物が出土しており、周辺に当該期の遺構が所在することをうかがわせた。

出土遺物の中で特徴的なものとして、前節において取り上げた円面硯のほか、「青野型」とも呼ばれる口縁部内面に段を有する土師器甕がある。従来、この土師器甕の分布域は、丹波国の何鹿郡から丹後国の加佐郡にかけての由良川流域において主体となっており、与謝郡以北の丹後国内では定山遺跡^(註21)(与謝野町)に一定量見られるほかは、大量の出土遺物中に数点含まれるのみという状況であった^(註22)。今回調査地の出土資料は、包含層出土資料という制約があるため、同時期の土師器甕との数量比較ができないという制約があるが、数点といった単位ではなく一定量含まれている印象を受ける。そのため、松山遺跡とは山ひとつ隔てたのみで地理的にも近い

定山遺跡と類似した状況が見られる。

以上の検出遺構と出土遺物の内容から見て、今回の調査地では、

- ①弥生時代後期前葉～後葉の遺物(下層包含層)
 - ②古墳時代中期前葉の竪穴建物跡と思われる遺構(下層遺構)
 - ③古墳時代後期前葉の遺物(下層包含層)
 - ④古墳時代後期末葉～飛鳥時代前葉の竪穴建物跡と思われる遺構(下層遺構)
 - ⑤飛鳥～奈良時代と思われる柱穴(下層遺構)およびいわゆる「青野型」甕や須恵器円面硯を含む遺物(下層包含層)
 - ⑥平安時代前～中期の遺物(上層包含層)
 - ⑦平安時代後期～鎌倉時代の柱穴・不明落ち込み遺構などの遺構(上層遺構)
- の変遷をたどることが可能と思われる。

今回の調査地と隣接して実施された府教委による第5次調査地点では、弥生～古墳時代を中心とした遺物を大量に含む包含層、性格不明の大型土坑を検出している。また財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターによる第4次調査地点では、縄文時代から中世にかけての大量の遺物とともに、柱穴や流路跡が検出されている。

これらの成果を踏まえると松山遺跡は、縄文時代から室町時代前期にかけて、竹野川左岸の段丘上を中心に集落が展開したことが明らかになったといえよう。

周辺を見渡すと、松山遺跡の北側に位置する扇状地から段丘上には、縄文～鎌倉時代の遺物、古墳時代中期後葉の竪穴住居跡、平安～鎌倉時代の掘立柱建物跡や流路跡などが見つかった沖田遺跡が所在する。松山遺跡は、沖田遺跡と類似した時期の遺構・遺物が見られ、竹野川左岸に展開した有力な集落の一つと位置づけることができよう。今後の周辺の調査に期待したい。

【引用註】

- 1 『松山遺跡第1・2次発掘調査報告書』京丹後市教育委員会 2011年
- 2 『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成二十一年度)』京都府教育委員会 2010年
- 3 石尾政信「沖田遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第99冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001年)
- 4 引原茂治「五十河遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第94冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年)
- 5 『新宮遺跡発掘調査概報』大宮町教育委員会 1999年
- 6 細川康晴・森正・近澤豊明「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1994 京都府教育委員会 1994年)
- 7 『左坂古墳群E・F支群・幾坂遺跡B地点・清瀆古墳群・五十河遺跡・新宮遺跡・沖田遺跡』大宮町教育委員会 1999年
- 8 『久住遺跡発掘調査概報』大宮町教育委員会 2000年
- 9 『大内1号墳発掘調査概報』大宮町教育委員会 1983年
- 10 東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇(近畿I)』東京美術 1989年
- 11 『古代のまつりとくらし』京都府立丹後郷土資料館 1979年
- 12 辻本和美「大内北古墳群(3号墳)」(『京都府埋蔵文化財情報』第113号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2010年)
- 13 『大内1号墳発掘調査概報』大宮町教育委員会 1983年
- 14 杉原和雄「新宮遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1974 京都府教育委員会 1974年)
- 15 中嶋利雄「丹後国御檀家帳について」(『金屋比丘尼城跡発掘調査報告書(京都府・加悦町文化財調査報告第3集)』加悦町教育委員会 1980年)
- 16 石崎善久「『青野型甕』について」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年)
- 17 『平成19年度田畔遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会 2008年 において松本達也氏が丹後・中丹地域出土の円面硯を集成している。
- 18 竹原一彦・藤原敏晃「府営圃場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年)
- 19 河野一隆・村田和弘・竹原一彦・石崎善久・増田孝彦・柴曉彦「国営農地(丹後東部・西部地区) 関係遺跡平成7年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第71冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年)
- 20①森島康雄「こくばら野遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992年)
②京都府立丹後郷土資料館にて実見。註17文献。
③『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会 1983年
④戸原和人「松ヶ崎遺跡第5次」(『京都府遺跡調査概報』第82冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998年)
⑤石崎善久・黒坪一樹・福島孝行・石尾政信「国営農地(丹後東部) 関係遺跡平成11年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第93冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年)
⑥増田孝彦・岡崎研一ほか『京都府遺跡調査報告書』第21冊 遠所遺跡 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997年
⑦坪倉利正「竹野遺跡発掘調査」(プリント)峰山高校史学部 1968年
⑧『岩木遺跡』丹後町教育委員会 1989年
⑨『難波野条里制遺跡発掘調査概要』宮津市教育委員会 1990年
⑩石尾政信「大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第118冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2006年)
⑪『宮津市文化財調査報告』第22集 宮津市教育委員会 1991年
⑫註17文献
- 21 石崎善久「定山遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第54冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1993年)
- 22 口縁部内面に段を有するいわゆる「青野型」甕は、口縁部の破片であれば小片でも胎土・色調・形状の特徴から容易に判別できるものである。周辺の新宮遺跡や久住遺跡の発掘調査では、小片であっても図化していたが、いずれも調査地内で1点から2点のみの出土であった。今回の調査地内からの出土資料はすべて図化しておらず定量比較はできていないが、過去の2遺跡の出土比率と比較すると数量が多く、大きな差異を感じた。

写真図版



図版 1



(1) 調査前遠景



(2) 調査後遠景(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター提供)

図版 2



(1) 上層遺構全景(北東側より)



(2) 上層遺構全景(南西側より)



(3) C・D区上層遺構全景(南西側より)

図版 3



(1) 上層遺構 不明落ち込み遺構SX111・134(D区)



(2) 上層遺構 不明落ち込み遺構SX141・162(D・E区)

図版 4



(1) 上層遺構 土壙SX112(D区)



(2) 上層遺構SX226検出状況(G区)



(3) 上層遺構SX226調査後全景(G区)



(1) 下層遺構調査後全景 (財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター提供)



(2) 下層遺構調査後全景

図版 6



(1) 下層遺構 竪穴住居SI301検出状況(B区)



(2) 下層遺構 竪穴住居SI301調査後全景

図版 7

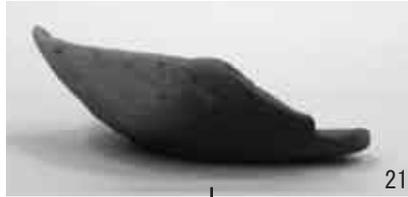
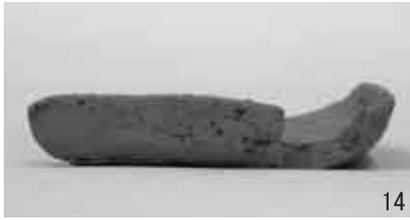
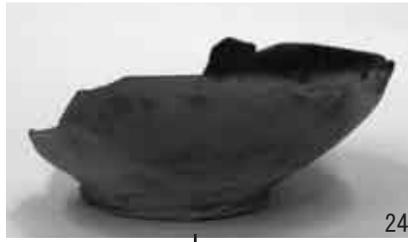


(1) 下層遺構SI303 調査後全景(E・F区)

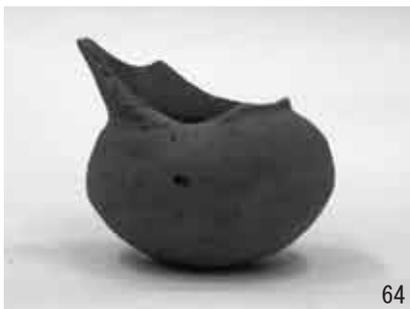


(2) 下層遺構 G～H区調査後全景

図版 8

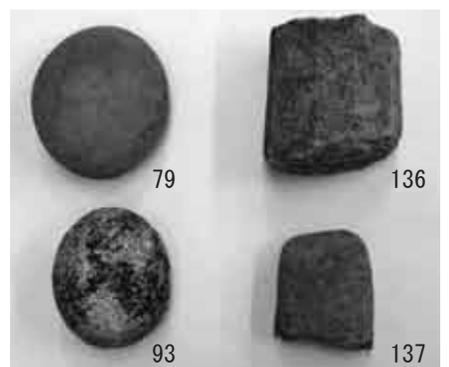
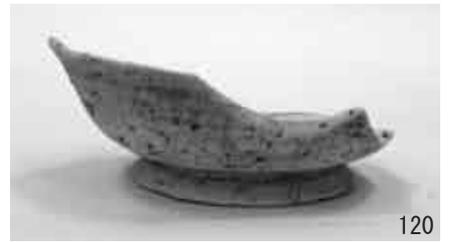
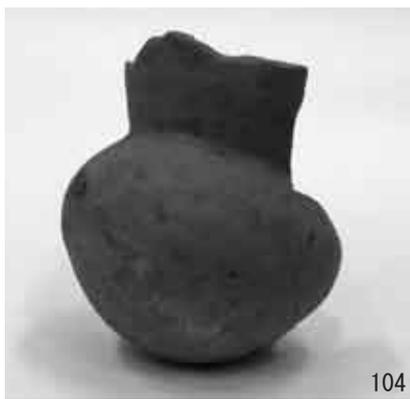


(1) 出土遺物(上層遺構・上層包含層)



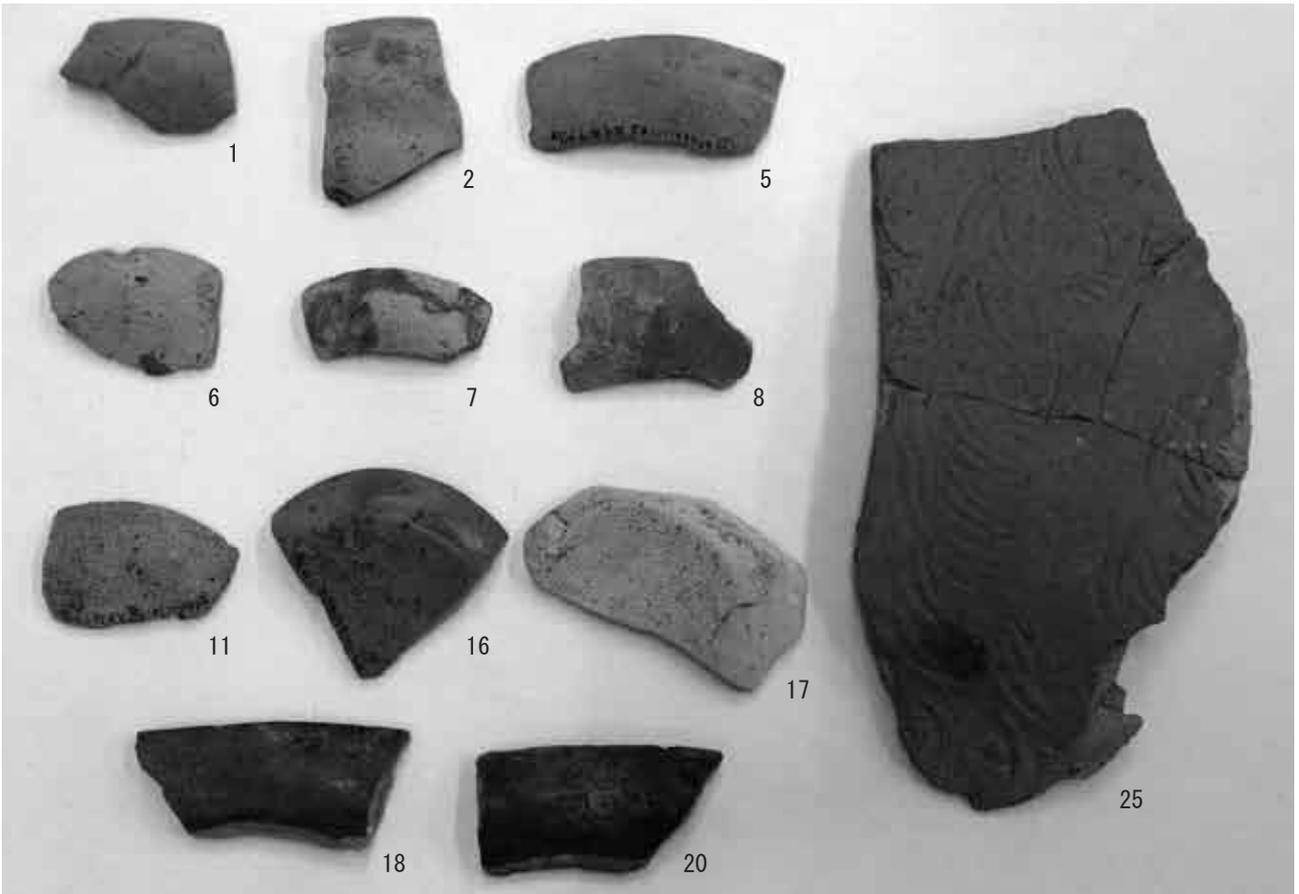
(2) 出土遺物(下層遺構)

図版 9

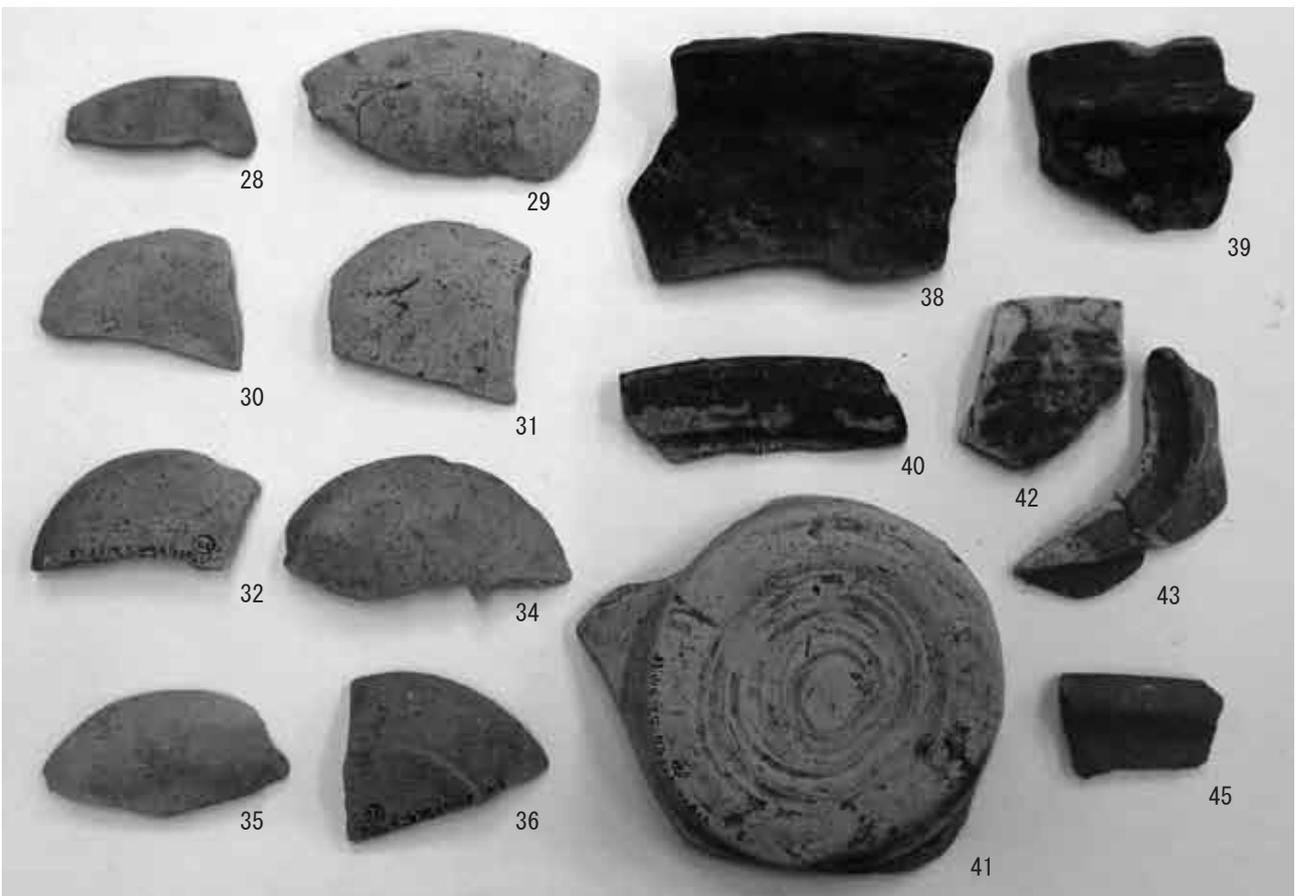


(2) 出土遺物(下層遺構)

图版10



(1) 上層遺構出土土器

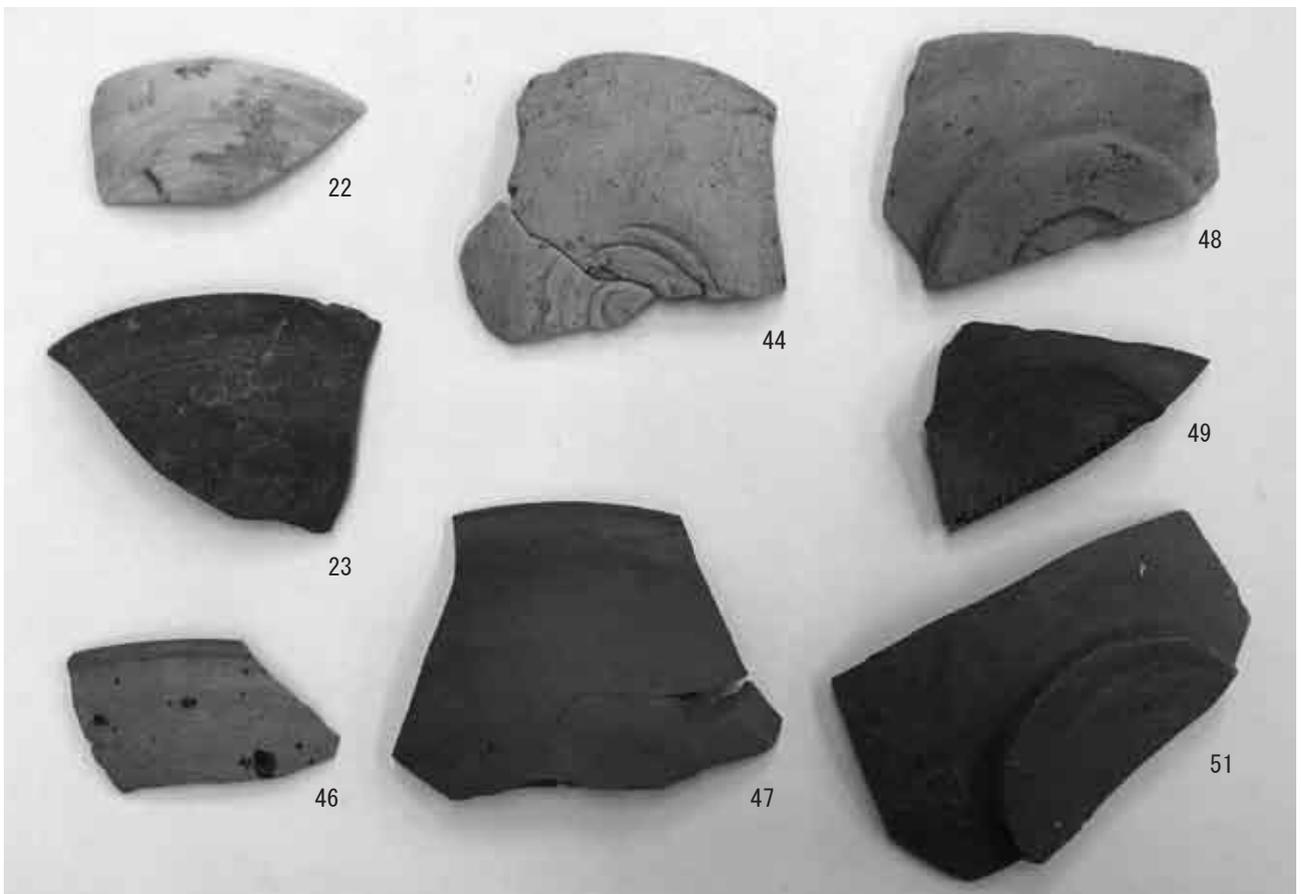


(2) 上層包含層出土土器

图版11



(1) 上層遺構・包含層出土土器(磁器)



(2) 上層遺構・包含層出土土器

图版12



(1) 下層遺構出土土器

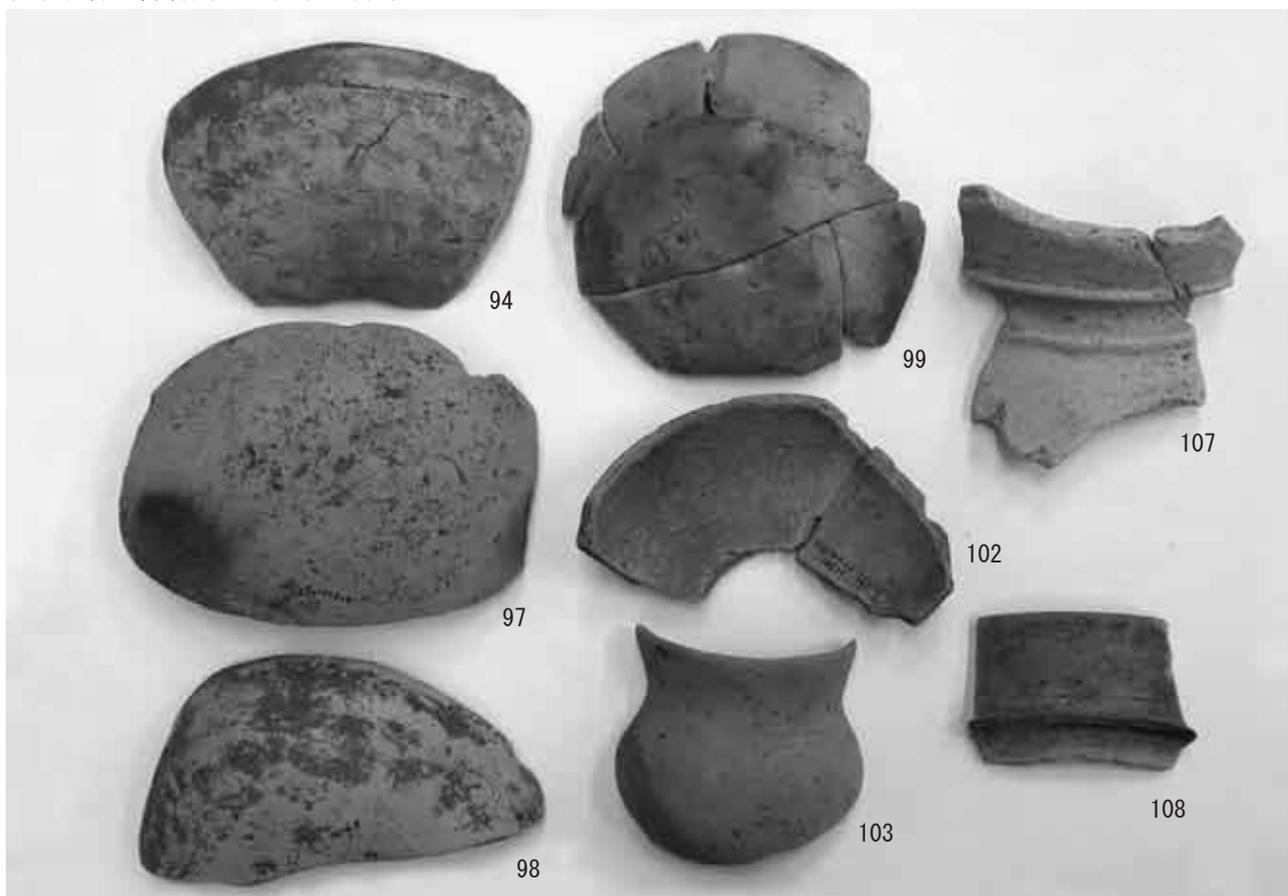


(2) 下層遺構出土土器

图版13

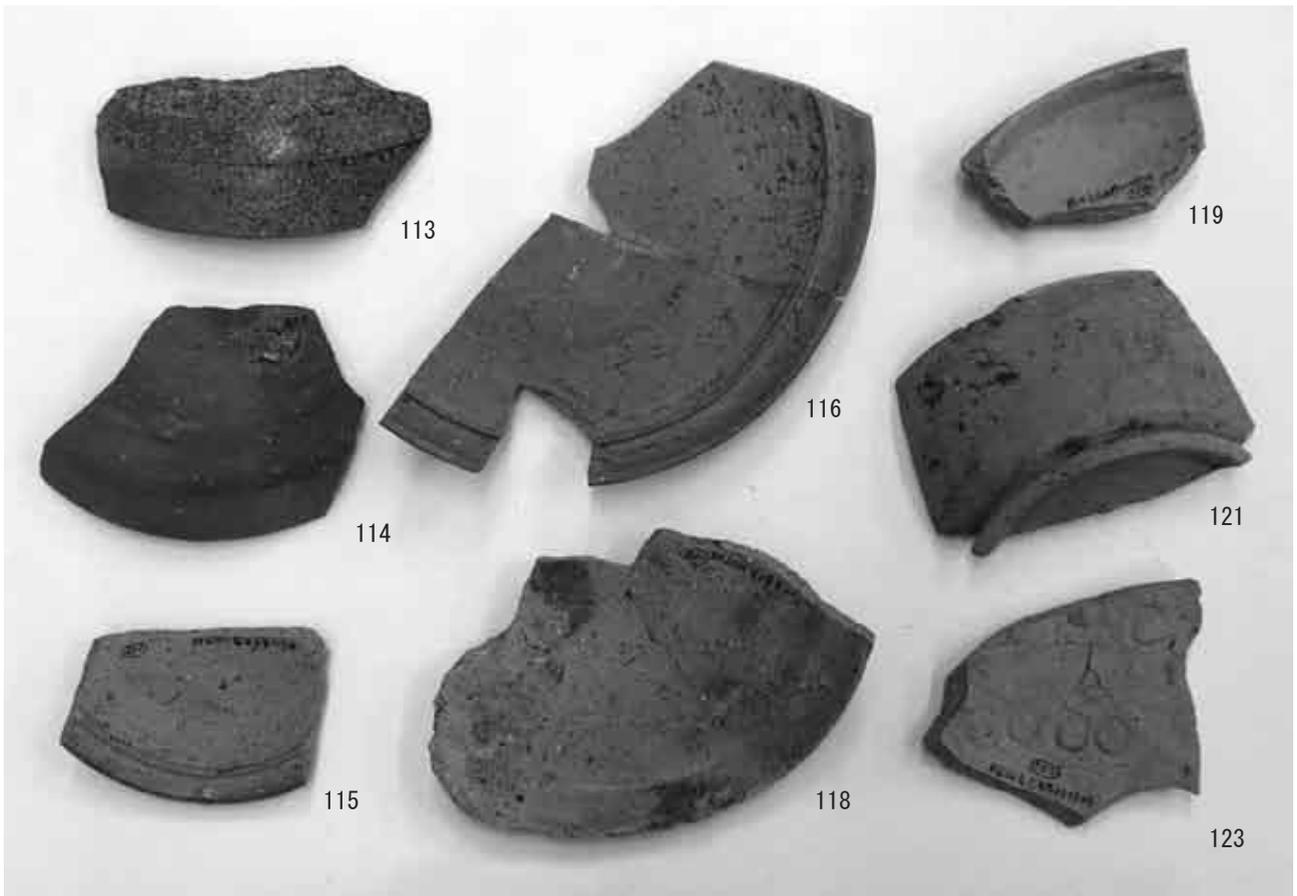


(1) 下層包含層出土土器(土師器)

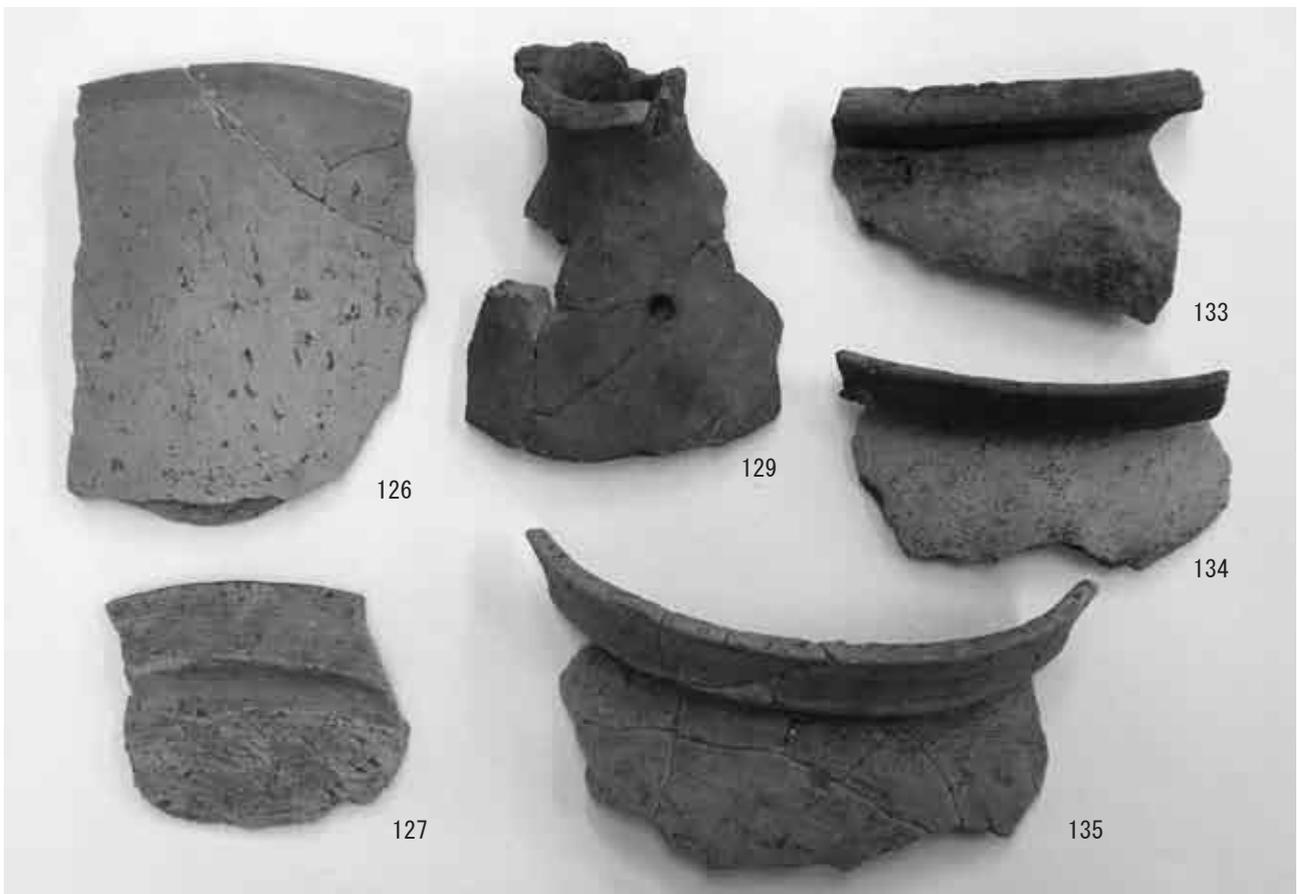


(2) 下層包含層出土土器(土師器)

图版14



(1) 下層包含層出土土器(須惠器)



(2) 下層包含層出土土器(弥生土器)

報告書抄録

ふりがな	まつやまいせきだいろくじはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	松山遺跡第6次発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	京都府京丹後市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	岡林峰夫・橋本勝行							
編集機関	京丹後市教育委員会							
所在地	〒629-2501 京都府京丹後市大宮町口大野 226 TEL0772-69-0640 FAX0772-68-9061							
発行年月日	2011年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘 面積 ㎡	発掘 原因
		市町村	遺跡番号					
まつやまいせき 松山遺跡 (第6次調査)	きょうとふきょうたんごし おおみやちょうもりもと こあざ まつやま・ おりと・みやのおく 京都府京丹後市 大宮町森本小字松 山・織戸・宮の奥	26211	186	35° 35' 16"	135° 8' 4"	20100720 ～ 20100903	113	記録 保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
松山遺跡 (第6次調査)	散布地	弥生時代後期～ 鎌倉時代		竪穴建物跡、 柱穴、土壇、 不明落ち込み遺構		弥生土器・ 土師器・須恵器・ 黒色土器・ 瓦質土器・瓦器・ 石製品		上層遺構(平安時代 ～鎌倉時代)と下層 遺構(古墳時代中期 ～奈良時代)を検出
要約	<p>これまで縄文時代後期の注口土器や弥生土器が表採されているのみで様相の不明であった松山遺跡の記録保存調査を実施した。その結果、上層遺構(平安時代～鎌倉時代)と下層遺構(古墳時代中期～奈良時代)を検出し、コンテナ20箱の遺物が出土した。</p> <p>遺構・遺物は、①弥生時代後期前葉～後葉の遺物②古墳時代中期前葉の竪穴建物跡と思われる遺構③古墳時代後期前葉の遺物④古墳時代後期末葉～飛鳥時代前葉の竪穴建物跡と思われる遺構⑤飛鳥～奈良時代と思われる柱穴および須恵器円面硯を含む遺物⑥平安時代前～中期の遺物⑦平安時代後期～鎌倉時代の柱穴・不明落ち込み遺構などの遺構の変遷をたどる。</p> <p>第4・5次調査の成果をあわせると松山遺跡は、縄文時代から室町時代前期にかけて、竹野川左岸の段丘上を中心に展開した有力なW落の一つであることが明らかになった。</p>							

松山遺跡第6次発掘調査報告書

(京都府京丹後市文化財調査報告書 第6集)

発行 平成23年3月25日
京丹後市教育委員会
〒629-2501 京都府京丹後市大宮町口大野 226
TEL0772-69-0640 FAX0772-68-9061
印刷 たつみ印刷